許請的作

30
507

俳句講話

明治
39 11 14
内交

序

世間俳を説くもの、皆、徒らに語句を解剖し、文字を分析し而して能事了れりとなす。譬へば、これ、花を説かんとしてその蕚と瓣とを示し、水を説かんとしてその酸素と水素とを示すの類、唯形を盡し、理を究むるのみ、その情致は即ち闕らざるなり、花の形は或は盡したりといはん、水の理は或は究めたりといはん、櫻花の美は即ち闕らざるなり、流水の情は即ち闕らざるなり。古人謂へるあり、植物と流水との眞意義を敎へ、吾人をしてその生命を分有せしめしものは、リチアスにあらず、カパンヂッシュに非ずして、セキスピヤなり、ウォーズオースなり、キーツなりと、眞なるかな。畏友瓊音君の斯道に於ける、獨りよく彼の科學者の域を脫して、詩人の秘鑰を啓けるものといふべし。新著成るの日、謹みてその成功を祝して、敢て卷首を瀆す。

丙午季秋　　佐々醒雪

凡例

一、この書はこれから俳句を作らうといふ人の爲に幾分か道しるべにならうと信ずる。すでに俳人に成濟まし た方が御覽になつたら御目だるいとばかりであらう。

二、修辭、規則は習ふうちに自ら飲込むべきものであるからこれには極めて簡單に說いたのみである。

三、第二篇は嘗て中學世界に連載した評釋である。この評釋は故更平易な句を採つて其句々を土臺にして詩趣を說くを目的としたものである。この評釋は餘談

凡例

を多く交へて隨筆體放談體に書いた。この評釋は夏の終から書始めて滿一年で終へたので、その途中から今人の句も交へることにしたから、春夏のみに今人の句が交つて居る。

四、この類の書は既に先輩の諸先生によつていろ〳〵著されて居るが、僕はこの書を著すに當つて、先輩の著書を參考にしなかつたから、或は重複し或は衝突する箇所があるかも知れぬが、それ等のことを顧みず、たゞ僕は僕の考を述べたまでゞある。

明治三十九年十月十日

瓊音識

目次

第一篇　俳句作法

第一章　俳句の價……一
第二章　句の材料……九
第三章　句の修辭……一四
第四章　作句上の規則……一七

第二篇　俳句評釋

第一章　春の句……二三
第二章　夏の句……九八
第三章　秋の句……一三九

目次

第四章　冬の句……一九四
第三篇　參考書
第一章　古人の俳句集……二二一
第二章　古人の俳論書……二二三

（終）

俳句講話

沼波瓊音著

第一篇　俳句作法

第一章　俳句の價

午前曇午後雨といふ癖になつた日和も、今朝やつと直つた、拭ふが如き快い秋日和となつた。庭を見ると、菊の周りの垣竹の上に赤蜻蛉が一つ悠然と休んで居る。乾いた風が強く松櫻の梢を搖ぶつて騷がしい音を立てゝ居るが、あ

の低い垣のあたりは極めて靜穩で、蜻蛉は何處で風が吹くやらと云つたやうな樣子で、羽も動かさず菊の花に對して止まつて居る。その樣が身に泌みて面白く感ぜられる。あの垣竹の蜻蛉の樣子は一の詩趣である。俳句にして宜い詩趣である。

斯ういふと人あり非難するであらう。兎角俳人は蜻蛉が垣に止まつてるといふやうな小さな詩趣をのみ好んで採る。俳句は到底小さな詩趣しか捕へ得ぬものである。すべての文藝中最小なるものである。「俳諧は蓋し雜誌の餘白かな」と罵殺したい位なものだ。

僕は答へる。俳人は小さな詩趣をのみ捕へるものでは

決して無い。蜻蛉、きり〴〵す、鬼灯、椎の實などの小さな趣を詠ずると共に、天の川、稻妻、野分、霧などの大きな趣をも詠ずるのである。

荒海や佐渡に横たふ天の川

などは隨分大きな廣い詩趣では無いか。俳句は形こそ最短であるが、こんな詩趣をも詠じ得るものである。小さな詩趣しか捕へ得ぬと思ふは誤である。

非難者は更に言ふであらう。大小の論は止めて、簡單複雜の論にしよう。成程名手の吟には大きな詩趣を捕へ得た句も隨分ある。併し兎にも角にも僅か十七字である。どんな大きな詩趣でも十七字で寫し取れる限りに縮め即

俳句作法

ちその詩趣の中で十七字で言ひ得る分量のものだけを選んでそれで甘んずるのである。荒海の句でも何處から佐渡を望んだ景であるか、この景に對して芭蕉はいかに感じたか等のことは、この句の序を見なくては、この句の上ばかりでは解らぬ。それ等のことまでは十七字では言盡せぬからである。長い詩形を用ふればそんなことまで十分に言現はすことが出來るのに、十七字の俳句はどんな複雜な詩趣に逢つても、それを簡單にしてやつと吟ずるのである。この點から俳句の價値の低いことが確言出來はしまいか。

僕は更に答へる。御說甚御尤である。仰の如く俳句では簡單なことしか顯はされない。

俳句の價

躑躅活けて其陰に干鱈裂く女

などがもう複雜な方に數へられて居る。垣竹に止まつてる蜻蛉でも、頃日中雨が降り續いて陰氣であつたと、今日始めて霽れたと、風が高く吹いてると、蜻蛉はそれを知らず顏に居ると、菊に對して居ると、その蜻蛉は、赤蜻蛉であると、その菊は野菊で、咲いてるのも蕾んでるのも紫のも白のもあると、これ等のと一纏めにして一の詩趣であるが、これを皆俳句に言ひ込めるといふことは到底出來ない。天氣の極好い日に赤蜻蛉が垣竹に靜に止まつてる、といふ趣以上に複雜にいふことは隨分むつかしいことであらう。俳句は簡單なことしか言へないものであるに違ない。

俳句作法

併し簡單な詩趣が複雜な詩趣より價が低いものとは決して言はれない。複雜な自然を其儘に寫す寫眞といふ便利なものが出來ても、人はなほ繪畫を要求する。繪畫は多少の差こそあれ自然を簡にして寫すものである。その簡にしたといふ所から繪畫の味が出るのである。繪畫の中でも、人は密繪を要求すると共に一方に俳畫スケッチ畫の如き疎畫を要求する。この疎畫は其の疎なる所に、密畫で見えぬ味があるのである。疎畫がいかに巧く出來て居ても密繪の下に付くべきものだ、とは誰しもいひ得まい。これがいひ得なければ、俳句が他の長形詩の下に位するものだとも言ひ得ない筈だ。俳句は簡單な詩趣を寫す、他の長

形詩は複雜な詩趣を寫す、といふので、そこに更に位置の優劣は無い。この優劣を論ずるのは酒と菓子といづれが味佳きかと比較するの愚と同じである。

俳句の價

こゝに言ひ添へておくことがある。例を露伴の土偶木偶に取る。あの小説に、卜川が幻境を辿つて前世に我爲に情に死したる女の許に來り、そこにて入浴し、浴室を出て坐敷へかへる時、木犀の香の闇に流れて薫り來るを聞き、あれは前世に己が植ゑしものといふことを朧氣に意識する所がある。この塲に於ける木犀の香は言ひ知らぬ幻秘な意味を持つて居るのである。併し浴室を出て闇に木犀の香を聞くといふ其事は、斯る幻境で無くても一の詩趣がある。

幻境の幻味を助けるといふ、附屬的の狀態でなくても、それ自身獨立の詩趣があるのである。俳句では斯ういふ獨立の詩趣を採るのである。小說家等は斯ういふ詩趣を他の詩趣を助ける背景として用ふるのである。俳句は斯ういふ詩趣の獨立した狀態の價値を發揮するものである。

「荒海」の句でも、寂しき行脚中の芭蕉の感想を助けるといふ狀態で無く、見る人の誰なるかに關係せず、その景自身の獨立してる詩趣を顯はして居るものである。

俳句は十七字でいへる程度の簡單な詩趣を寫すその所が特色長所である。その特色長所を以て他の長形詩廣く他の諸文藝と肩を比べる價のあるものである。

第二章　句の材料

一つ句が作つて見たいと思ふ、ところが一體何を句にしたら宜いか更に手の附け樣が無い、といふ言葉は、初學者からよく聞く言葉である。斯る際に對して許六がうまい勵ましを言つて居る。曰く、

○俳諧は無きと思へば無きものなり。あれども案じあてぬと思ひて案じ侍れば成程有る物也

この意氣込が無くては句は作れぬ。俳句に採るべき材料は至る所に轉がつてるといふ信仰を持つて掛らねばならぬ。こちらがぼんやりして居ても、向うから、私が俳句の材

俳句作法

料でござります、と名乘つて來るものでは決して無い。こちらに何奴も此奴も悉く我が句の材料にしてやるぞといふ意氣込があると、面白い程恰好の材料を見付けることが出來るものである。その證據に、今日は句を作らうと思つて遠足でもすると、少しでも作れるものであるが、そんな考も無く唯、ふらりと出掛けた時には、余程の妙趣に逢ふで無ければ、自ら句が出來上るといふことは先づ無いものである。

其角が、

情を凝らしてさて景を尋ぬるがこの道の手なるべし

と言つたのも此處の事である。

飛鳥山へ花見に行く。すると師匠らしい老女が三味線

句の材料

を彈いて居る。老女の頭をよく見ると、もう白髮が隱されず交つて居る。そこへ花がちら〳〵散りかゝつた。といふ所が目に着いたとする。これは句の材料になる。材料がよく調つて居るから、少しも細工を加へず、それをその儘寫し出せば句になるのである。かういふ場合には、どうした ら在りの儘に寫されるかといふことに工夫をして、自分が結搆な自然の材料へ要らぬものを結び付ける、などのことを決してしては行けない。

夏の夜更け、寒村の停車場で一時間余りも汽車を待つて居る。外に人影も稀なので淋しくて仕樣が無い。この時ふと、今は夏だから宜いが、冬、雪でも降つてる夜だつたら、ど

俳句作法

んなに詫しからうと思ひ付く。さうして今の己が淋しい感と今降つては居ない雪といふものを結び付けて句にする、といふことがある。これは現前(まのあたり)の材料のみで無く、それに己が前に經驗した雪といふものを配して、句にするのである。これも惡いことでは決して無い。併し現前(まのあたり)の材料だけの方が味があるのに、强ひて不必要なものを結び付けた爲に、却て不自然な句になる、といふことが往々あるから注意せねばならぬ。

自分はいつもの書齋に座つて、蓮の句を作らうとして居る。目前には蓮の花は無い。併し今までに見た蓮の花の樣を回想し、その蓮の在り場所、それを見て居る人等を、おの

が腦裡に勝手に描いて見て、そのうち氣に入つた趣が纏ると句にして書く。この場合には現前には材料を少しも持て居ないのである。句を練習する時、句を作るを樂む時、運座でも遣る時は、大抵これである。この際には成るべく己が實際經驗したことのみを材料に採つて欲しいのである。想像に任せて不自然な、無理な句を作り出すのは見苦しいことである。

句の材料

句の材料は己が目前にあるもの若しくは前に見聞したものを採るを本體とするが宜い。子規を聞いたことが無くて子規の句を作り、富士を見たことが無くて富士を詠み込む類のことは成るべく避けて欲しい。(想像そのことに面白味の

俳句作法

ある句は別問題である)又己が感想を言顯す場合には、美しと感じたものを美しと云ひ、醜しと感じたものを醜しと云ひ、たゞ古人の例にのみ倣つて己が感を顧みぬといふとの無いやうにすべきである。

第三章　句の修辭

「米洗ふ前に螢が二つ三つ」といふと螢が死んでるが、このにをを。に更へると螢が活きて來ると云ふ例は、一字置くにも注意せねばならぬといふ、解り易い戒になる。俳句は短いものであるから、一字二字も輕々しく置いてはならぬ。

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

と云つても、

枯枝に烏とまりぬ秋の暮

と云つても、意味に於て些の違ひは無いが、感じの上に於て大なる差がある。「烏のとまりけり」と延ばしたので、物の哀れを沁々と感ぜられる樣がよく顯はれてるが、「烏とまりぬ」では何でも無いことのやうに聞えて、「ハアさうかい」と交返して遣りたい位のものだ。

句の修辭

白梅や墨芳ばしき鴻廬館

といつても、

しら梅や墨芳ばしき鴻廬館

といつても、共に同意味ではあるが、「白梅」といつた方が「白梅

といふよりも凛乎としてこの趣をよく顯はす。

すべて意味は同じでも甲のいひ方にした方がよく感が顯はれるか、乙のいひ方にした方がよく感が顯はれるか、といふ點は十分考へねばならない。

語をよく選んでも、その語の置方に亦工夫を要する。德元が、

俳諧も一句の仕立やう肝要なり。上の五もじを下へなし、下の五文字を上へあげ、色々に句を練り侍らば、おのづから句柄もよく後悔もあるべからず。たとへば畠山兵衞佐と云名を同文字にて山畠佐兵衞と號し侍らば無下に劣り侍る也

と言つてるのは此所のことである。

衣更へ越後屋に絹裂く音すなり
越後屋に絹裂く音や衣更へ

と並べてどちらが佳いかと言へば、前の方は語の置方無下に劣つて、後の方がすらりとして品高きことは、誰にも解るであらう。

修辭の細かいことは、句集を讀み味ひ先輩に添削を乞うて居るうちに、自然と飲み込むが宜いのである。

第四章　作句上の規則

何の道でも初學者が煩瑣な規則を先づ知つて、それに依

俳句作法

てその道を辿らうとするのは、窮屈な目をするだけで、餘り良い結果を得ることは出來ぬ。作句上の規則も修辭と同じやうに、習つて居るうちに自ら覺え込む方が宜いのである。だから此所で詳しい分類した規則などは擧げないで、唯一寸心得ておくべきことを一口言ふに留めて置く。

句を作るには季を入れるといふことが必要である。「梅」が詠んであれば春の季の句で、「涼み」が詠んであれば夏の季の句である。併し全く季の無い句も無いでは無い。

歩行ならば杖突坂を落馬かな

の類である。かういふ無季の句を近來も遣る人がある。無論詩趣には時に關せぬものと時に關せぬものとあるから、その關せぬものを描くには無季の句であるのが至當ではある。併しどうも季の無い句といふものは面白味が少い。といふのは短詩のことであるから、聯想が大に必要で、これあるが爲に形は短くても意味が長く感ぜられるので、聯想が出來る余地が無いと、十七字ならば十七字だけの詩趣しか感ぜられなくて、俳句の特徴たる一種の余韻が無くなるからである。

作句上の規則

夏草やつはものどもが夢の跡

の句でも、夏草と言つてある爲に、夏草以外の夏の日光夏の空の色夏の心持等まで明瞭に聯想することが出來るのである。季を入れるといふことは句を味あるものにする大なる

俳句作法

要素である。

又戀、祝賀、哀傷、別、述懷等の句でも、四季の景物によつて其意を顯すべきである。

飛ぶ螢あれといはむも獨かな

は閨怨の句、

呼聲は絶えて螢の盛かな

は人の子を亡くしたのを悼んだ句である。斯ういふやうに作るが宜い。

「梅」は春「涼み」は夏の如きは解り切つたことであるが、月は四季いつでもあるのに、たゞ「月」とのみいへば秋になる、蒲團もいつも用ふるものであるのに「蒲團」といへば冬になる、類の、

作句上の規則

とがある。これ等はその物の趣を最よく發揮する季候の部に組入れたので、便利な約束である。かういふことは季寄の本又は類題句集の目錄を常に見て居れば、解つて行く。

句には「や」「かな」等の感歎詞を使ふことが多い。この感歎詞を二つ以上使つてはならぬ。二つ以上使つた爲に面白いといふ場合も無いでは無いが、初學者の試みるべきことで無い。

五月雨の竹にはさまる在所かな

といふ句は「かな」一つであるから、句が調つて居るが、

五月雨や竹にはさまる在所かな

とでもすると、兩頭の蛇のやうな形になつて趣が極らなく

なる。

俳句は我國の文藝の一である。だから俳句を作るについても我國の文法を一通り心得て置く必要は無論ある。俳句を作るに文法は知らずとも宜いといふのは誤である。併し俳句は文藝であり韻文であるから、文法に縛られ役せられてはならぬ、却てこちらから文法を操つて行かねばならぬ。文法を破つた方が面白い場合、破つた方が感じのよく顯はれる場合には、無論破るが宜いのである。これ亦初學者の妄りに試みるべきことでは無い。

作法を記すことはこゝで擱筆しておいて、次篇の評釋中、句々に就いていふ言でこの篇の缺を補はうと思ふ。

第二篇　俳句評釋

第一章　春の句

初空となりぬる星の一つ哉　　麥人

元日の明方の空が初空です。東方が段々と白んで、紅が山の端に漲つて來て、星が次第々々に消え去つて、唯一つ光の強い星が殘つて居るのみで、はや初空の景色になつたといふのである。いかにも神代の事も思はるゝ元旦の高潔な感がよく寫してある句である。この星が悉く消えてしまつた所を言はずして、一つだけ殘つた所を捕へたのが作者の腕で、この一つの星に言ふべからざる詩趣が輝いて居

俳句評釋

るのである。

元日も旅人を見る大路かな　沾德

大通りを見れば、今日は元日だといふのに、旅人の行くのが見える。忙がしく暮す人もあるものだとの感もあり、又田舍ならば元日は人皆元日らしいので、單純であるが、町は元日にも、元日らしくない人も見えて、世の複雜が現はれてゐるといふ趣もある。今日のやうに複雜になつて來ては、元日の旅人も、珍らしくない。元日でも汽車は旅人を滿載して運轉して居るのである。僕も嘗て元日の旅人となつたことがある。大晦日の夜新橋を出發して鄕里に向つたので。さて濱名湖にかゝる所で、初日の出が玻璃窓を目映く射た。すると乘合の旅客は莞爾々々しながら、互に御目出度う々々々と賀辭を述べた。僕にはこの車中の御慶が非常に面白く感せられた。西洋では卅一日の十二時が鳴り終ると御慶をやるさうだが、これは人爲的も甚しいものである。空が暗くて何の變化も無いのに、年が新になつたといふ感が起らう筈が無いのである。

元日の人通りとはなりにけり　子規

何の澁滯も無く言つて退けた所が、いかにも技が乾れて居る。元日でも朝早くは、別に賑やかなとも無いが、追々と

靴音下駄の音が繁くなつて、あゝいかにも元日らしい人通りになつたわい、といふところ。まづ午前十時頃の景であらう。

叢竹や伏して奏する雪の瑞　紅葉

去年の目出度い嘉瑞を、國々から申したのを、記しておいて、元日に主上に奏上するといふ事があつた。これを奏瑞といふ。この句は奏瑞の意を詠じたもので、新年雪といふ勅題の出た年の作である。元日に雪が降つて、御殿の前の竹が皆雪の重みで撓んで居る景である。その竹を擬人して、竹どもが皆主上に對して伏して、雪の瑞を奏上して居ると見たのである。雪は豐年の兆としてある。一體目出たいといふ事は平凡なもので、祝の句には面白味のあるのは少いのであるが、この句は祝の意を言つて、しかも面白い、或一派の人は、理窟だといつて排斥するかも知れないが。

不相變と申すのみなる御慶かな　紅葉

新年の賀辭を述べることを御慶といふ。『まづ明けましてお目出度う御座います、舊年中はいろ〳〵と御引立に預りまして云々』と長々述べるのは、いづれ商人か何かで、年も老つた人達であらうが、鳥打を冠つて年賀に歩く輩は『ヤ、相變らず』と御辭儀したゞけで、トットとお歸り。

俳句評釋

五六人一かたまりの禮者かな　三川

年賀に回る人が禮者である。腰辨が長官殿への年賀、生徒が先生の所への年賀の實況である。一人が口上を述べて、あとの連中は後の方で御辭儀だけして、名刺だけは正に間違なく納めて去る。門を出ると『どうだい、あの玄關番の横柄な態は、ハア〳〵といふ音がどうしても鼻孔から發するとしか思へない』などゝ、惡口の喋初。

但し、この句は偶然五六人が落合つて一かたまりになつたと見てもよい。

折てさす其も門松にて候　一茶

世間の人は大きな立派な松飾をするが、俺の所はそんなとは出來ぬ、たゞ印ばかりに、近くにあつた松の木の枝をへし折つて門の兩脇へ一寸さした。さて、これでも門松には相違ござらぬ。候がよく活きて居る。

初夢や獨り占うて曰く吉　松軒

吉い初夢を見ると、其年は幸運だといふとだ。エヽト、僕の見た初夢は、階子段から落ちた夢だつたナ。どうもこれは今年の卒業試驗に落……否々そんな筈は決して無い落ちるといふのは、引力の爲に地球に引付けられるのだ。これは是有力者に引付けられる兆だ。卒業後の幸運疑ひ

なし。吉々大吉だぞ。

俳句評釋

老後の子賢にして筆始かな　虛子

筆始は書初のことである。老年になつてから出來た子、可愛さが一層、その子が賢くて何でもよくやる。老父は人の顏さへ見れば、子の話を聞かせて、賞めさせねば承知せぬ。川柳に所謂「子に叱られた吹聽をして歩き」を毎々やる老父であらう。さてその大自慢の子が筆始をやる、立派な、大人も及ばぬやうな筆勢で書く。それを傍で見て居る老父は涎も垂れさうな有樣である。

彈初に指の太りや琴のつめ　佳茗

彈初は二日の朝琴三味線などを儀式的に一寸彈くのである。この句に畫いた女は、もはや人の妻にでもなつて居るのであらう。平生は忙がしくて琴など彈く暇が無いが流石に今日は思ひ出して、彈初をやらうと琴のつめをはめると、嗚呼長くやらなかつたので、指が太くて爪が窮窟であるといふ趣。多少の感慨。

春の句

風の羽子後退りては打返す　抱魚

羽子が風の爲に吹かれる、打つ娘は風に向つて居るので甚だ打ちにくい、それを後へ退つては打ち、退つては打ちす

句評釋

る、巧な樣子を言つたので、纖巧とでも評すべき句である。

遣羽子の風に上手を盡しけり　子規

前のと同じ趣を言つたのであるが、前のは、後退ることだけを顯し、これは「上手を盡す」と言つて、或は後へ、前へ、右へ、左へ、自由自在に打ちまはる樣を顯して居る。うまく言ひまはしたものである。

相見ての後の心や歌がるた　西男

歌留多會で手と手が相觸れたのが、煩悶の種といふ、當世流行の趣である。それを、歌留多の中の句を取つて「相見ての後の心や」と言つてのけた所が、實に新しくて、そして何等小細工の痕が見えない。

春の句

且つ讀で且つ取る人や歌がるた　麥人

誰やらの句に「失戀の詩人かるたの讀手かな」といふのがあつたが、これはそんな陰氣な消極的なのでなくて、餘程元氣がよさゝうである。「アラ厭だ、見てからお讀みなさるんだもの」と急所を突く者がある。

曉や出初の半鐘打込んだり　麥人

四日消防夫の出初式、火事ならぬに東京中の半鐘が鳴る

俳句評釋

のはこの朝である。この「打込んだり」の語氣の勢よさに、出初そのものがよく現はれてゐる。

松とれて常の旭となりにけり　不角

門松は十五日まで立てゝおくのが古例であるさうな。今は區々だが、大抵七日までゞ取除くやうである。どうもこの門松を取つてしまふと、一向平凡になつてしまふ、旭のさし工合もふだんの通になつてしまつたといふので、一種の名殘惜しい淋しみ。

松過ぎて戸籍調の來たりけり　久寶

松の内が過ぎて松が取れてしまつたのを、松過といふ。平凡に散文的になつたところへ、巡査が戸籍簿を持て「こちらは、別にお變りはありませんか。」いやが上に平凡、いやが上に散文的である趣。どうも松過に戸籍調はたまらない面白味がある。山を拔くの俳力。

藪入の寢るや一人の親の側　太祇

十六日に奉公人が里歸りをする。それが藪入である。藪入をした子、といふべきを、單に、藪入、とのみ言つておくは俳句の常。藪入をして來た子が樂しげに足を伸ばして、久しぶりに親のそばで、寢物語をしながら寢る。ところが片

俳句評釋

親は無くなつて居るので、親のそばと言つても、たゞ一人の親の傍なのである。子も親もつい亡き人を想ひ出す憐れさ。この「一人の親」といふので無限の感を起させる。蕪村の春風馬堤曲に、この句が入れてある。

凧白し長閑過ぎての夕曇　太祇

一日晴れて長閑であつたが、あまりに長閑に暖かであつた果ては、晩方になつて曇天となつた。その曇つた空に、まだ凧が白く上つて居る景色。この「白し」といふのが、空の曇りの色をも顯はしてゐて、強い。この語が、この句の生命である。

夕凪や靜に紙鳶の下りて行く　風葉

風の靜まつた夕方、紙鳶を上げてゐた子も、もう糸を繰つて下ろすのである。それを遠くから見た景色。徐ろに紙鳶が下りて行く、追々暮の色が擴がる。風は少しも無い。いかにも靜な趣である。作者の「戀慕流」に一月の七八日頃、富坂から本郷臺を見た夕景色が書いてあつたが、そこに矢張りこの趣があつたやうに記憶する。

若草や臼をころがす翁あり　閑更

春の初、草の始めて萠え出づるを若草といふ。日蔭には雪が凍り付いて居るのに、日向にはやはや若草が萠えて居る

俳句評釋

まだ若くて弱々しい春其者の姿を見せてるやうで愛らしいのである。その若草の上を、老爺が臼を轉がして運んで居るといふ景色。其樣子が若草に配せられて、穩かな趣を成して居る。

「若草に臼をころがす翁哉」と、一寸遣りさうな句であるが斯うすると定まり過ぎて、且つこの翁が大主眼のやうに聞える。それをこの句のやうに「若草や云云」と仕立てると、若草が主になつて、臼を轉がす翁は其若草に添へてある人物になる。「あり」といふのでいかにも輕くなつて居る。同じ内容でも、句の仕立工合で、興趣の感じやうが違つて來るとは注意すべきである。

梅咲きぬどれが「むめ」やら「うめ」ぢややら

燕村

この句のはし書に「あらむつかしの假名遣ひやな、字義に害あらずんばアゝまゝよ」とある。梅馬等を「むめ」「むま」等と書く流がある、すると一方では「うめ」「うま」等と書くのが正しいといふ人がある。かういふやうな學者の愚論を燕村が罵倒したのである。梅があちこちに咲いたがさてどれが「むめ」で、どれが「うめ」だらう、そんな區別があらう筈が無い。梅が咲いたのだ、たゞ梅が咲いたのだ「うめ」でも「むめ」でもそんなことは構はない、といふのである。國語調査會の會議室へ、この短冊を掲げたら面白からう。

俳句評釋

見苦しき疊の焦や梅の影　凡董

日が一杯にさし込んで居る疊の上に、梅花の影が面白う畫かれて居る。此處に老人あり、苦茗を啜つて興に入つたが、この間來た客が吸殼を飛ばして疊を燒いた焦跡が、どうも目立つ、「今の者は作法を知らぬから困るわい」と、大に憤慨でもして居ようといふ有樣。疊の焦と梅の影、殺風景なものと高雅なものが、相並んでゐる、そこに言ふべからざる調和がある。

梅の月梅まで來れば松の月　閑更

向うの梅に月が懸つて居る、面白い景色ぢやと浮かれて

その梅の木の所まで行くと、彼方の松に月が懸つて居る、それからそれへと興が限り無く湧いて來る春夜の景である。こちらが歩を進めるに從つて、月が或は梅にかゝり、或は松にかゝる樣、面白くて堪まらない所がよく言ひ表されて居る。實に巧な句である。併し巧な爲に句の品格が落ちてる感じがする。さう感ずるのは僕ばかりかも知れないが。

春の句

紅梅に青く横たふ筧かな　柳居

よい句では無い。紅梅の咲いて居る邊に、竹の新しい、青々とした筧が横たはつて居る、といふので、紅梅の紅と青竹の青と相映じて美しいといふのが、この句の得意の所であ

俳句評釋

るが、どうも「紅梅に青く」と來たのが、故とらしくて、下品に聞える。「青く」といふことを言はなくて、「新しい筧」といふやうに改めたら、幾分か露骨を避けられるであらう。一體青と赤の配合は何によらず下品に感せられる。

梅咲くや面白さうに繩をなふ　葛三

梅の咲いた日當りで、お爺さんが繩をなつて居る。これだけでも平和な田舍の生活が想はれるが、この句で力のあるのは「面白さうに」の語である。このお爺さん大の樂天家で、小唄でも唱ひながら、勢よく繩をなつて居る。通りがゝりの人が言でもかけると、すぐ呼留めて「已れの若い時には」

と、三四十年前の手柄話でも聞かせようといふ、元氣のよい村の名物老爺であることが現はれて居るので、平和が愈平和になつてる。

春の句

蛙急に梅悉く斜なり　子規

急な蛙に梅が一面に咲いて居る。その梅樹が皆斜である、といふ凛とした強い景。「悉く」に力が十分ある。これは作者の得意の句であるさうな。山勢奔騰して逸馬の如き邊に、古枝槎枒として幽香溪に落ち、その花の白きと、苔の蒼きと相映じて、見る人をして仙化せしむる光景、探幽の畫にでもありさうである。

俳句評釋

梅の門よき人力の並びけり　小波

梅の咲いて居る門を、梅の門と言つたので。百花園の門の景とも思はれる。さうでなくば、左る紳士の別莊で、知人を招いて、觀梅の雅莚を開いて居るところで、奥では謠やら笑ひ聲などが折々長閑に聞えてる。門には人力車が澤山並んで居るが、いづれも御抱への立派なので、金の定紋が春の夕日に燦いて居る。「よき人力」の「よき」の爲に上品になつて、梅の花にうまく配せられて居る。

畑中に停車場あり梅の花　把栗

あへて秀でた句とも言へぬ、が輕く出來てゐて、よくある

景を易々と捕へてある。畑の中にある停車場はいづれ小さなので、急行の汽車は素通りをする驛。そこに梅が咲いて居る。ポカ〳〵と暖いので、驛長は窓を開けて外を眺めて煙草をふかして居る。大時計は修繕中といふ紙を貼られてゐる。汽車を待つ旅人は僅に二人、一人は紺木綿の大風呂敷を背負た婆さん、一人はニッケル縁の眼鏡を見よがしに掛けた村の若　　たりに陽炎がちら〳〵、何處かで眠いやうな子守唄が聞える。

より多く隣へ垂れし柳かな　一睦

垣の邊に柳がある。それが隣の方へ枝が餘計に垂れて

俳句評釋

ゐる、といふ趣。それを直譯語の「より多く」で云顯した所に才がある。誰かの句に「春の野に犬と而して子供かな」といふのがあつた、この「而して」とこの「より多く」とは好一對である。

砕けずに奥山椿流れけり　柳居

谷川である。奥山の方から椿が流れて來る、それが落ちた儘で花瓣一つ損せずに流れて行く、どの邊で落ちた椿であらうと呑氣な考を起すのも山家の閑寂の味である。

俯伏せに落並びたる椿かな　丈左

同じ形の椿が同じやうに俯伏せに落ちて並んで居る。平凡なやうで却て寫實の妙がある。是眞の畫のやうな、今ならば省亭の得意な畫のやうだ。

鶯のこちら向いたれば丸い顔　存亞

鶯が庭へ來て、すべての小鳥の癖のやうに、あちらこちらを落付き無く見る。ふつと此方を見た時に、眞正面から見ると鶯の顔は丸顔だといふ即興。例の如くに聲を賞せず、奇拔な所を句にしたのが面白い。雀でも正面から見れば丸顔であらうが、丸顔だといふやうな優しい興は鶯を見て始めて起るのである。僕はこんな句が好きでたまらぬ。

俳句評釋

ほうと鳴く鶯遠し峯の松　士朗

山路の春。路傍の石に腰掛けて草鞋を締直してゐると どこか遠い所で鶯が一聲ほうと鳴いた。其方を見上げると鳥は見えずして峰の松がうす霞を隔てゝ見える。梅の花などを配せずして松を配し、又鶯のほのかな聲のみを言つて、その姿を現さざる所に、高遠な詩趣がある。

鶯の我鳴く聲を見送るか　成美

面白い句である。鶯がホーホケキョーと鳴いて、ひよいと首を擧げて天の一方を見る、その樣子が、自分で發した聲を見送るやうだ、といふ詩的觀察である。芭蕉の「草の葉を

落つるより飛ぶ螢かな」の句がよく螢の擧動を微細に寫して居るが、これも鶯その者の擧動をよく緻密に現して居る。しかもこの方は主觀的の想像が加味されて居る。

臺町や鶯眞砂町に飛ぶ　碧梧桐

東京を知らぬ人には想像がしにくいかも知らぬ、ともに本郷の町の名で。臺町も高臺、眞砂町も高臺で、間が谷になつて居る。臺町から谷を飛び越えて眞砂町へ行つたのを臺町から見たのである。僕が高等學校の入學試驗を受けに春の頃から上京して、始めて下宿といふことをしたのは臺町の某館であつた。この館の横に空地があつた。朝飯

俳句評釋

前にいつも此處へ出て頭を清くするのを常として居た、向に砲兵工廠の煙突が見えて、下には小石川區の一部分が見える。左手の方が眞砂町である。上京した時は曇つて居た爲に富士を見ず、着京後も霞に障へられて見なかつたが或朝ここから始めて富士山を見て、早速故郷へこのことを報じた。生れて始めて父母の膝下を離れたので日々望郷の念に堪へなかつた。朝毎に此處に立つて故郷はどの邊だらうとしみ〴〵思つた。僕の爲めには大に意味あるこの空地で、鶯を聞いたことも往々あつた。僕はこの句を見ると、すぐ某館を思ひ出すのである。今はやはり本郷の西片町に住んで居るが、年の暮頃から鶯をよく庭に見る。どうかすると平氣で縁先を飛んでゐることもある。東京の市内には、他の都會より比較的かういふ小鳥の入り込むことが多いのかも知らぬ。

春の句

鶯の終に寫眞に撮られけり　麥人

寫眞道樂の若紳士、梅の枝に剝製の鶯を縛りつけて撮るなどは感心せぬ、生物の鶯を早撮りにして、大に寫友に誇らうとして待つて居ると、恰も日曜の午前、庭の梅に鶯の聲、すはこそと機械を取り出して折を見てゐると、鶯は遠慮なく飛び去つた。落膽するとまた來た。今度こそと思ふと、杉の枝にとまつた。そこちや物にならん、梅へ來い梅にとま

れ、と言つても思ふ樣にならぬ、苛つてるうちに梅に止まつた。手際よく撮つて胸なでおろしたる體。「終に」が巧を極めてゐる。「終に」の語が今までの鶯の敏捷なる擧動、寫し手の焦慮を十分示してゐる。鶯と寫眞もよく調和して居る

寫眞で思ひ出したが、僕の友人が寫眞道樂で日曜毎に機械を持つて市中を歩いて居たが、或日山谷を通ると、葬式に出遇つたので、雀躍して、その行列が橋を渡るところを撮つて、出來上つてから、臺紙に「葬式を山谷と聞いて親父行き」と書いて得意がつてゐる。

春寒や日長けて美女の嗽ぐ　紅葉

春の初めの寒さが春寒である。春といへば華やかで陽氣である、それの寒さをあらはせば春寒の句になるのである。暖かみと寒みとを含んで、寒みが勝つた景趣を捕へねばならぬ。これは一寸難いことである。この句は或はこの注文通りの妙味は無いのかも知れぬ。妾かなんか、ダラシの無い生活をして居る美女が、寒いので朝寢を十分して十時頃にやつと起きて手水を使つて居る、といふ、三人妻かなんかにありさうな樣である。この句の寒みを顯はしてゐるのは、美女の朝寢である。寒いから朝寢をした、といふところにあるので、理窟だといはれても致方が無い。僕はたゞこの艶麗なる趣を採つたのである。

俳句評釋

藝なしの餘寒を裸踊かな　紅葉

餘寒は春なほ寒さの殘つてるのを言ふ。宴會での藝盡しに、隅に居た藝無し男が、負けぬ氣になつてすつ裸になつて跳ねまはる所である。冬の寒さに裸踊はどうも調和しないし、あまり殺風景すぎる。踊るといふ陽氣な所が餘寒にうまくはまるので、又寒いのに裸になつた所が藝なしの藝なしたる所を顯はして居る。或人が紅葉の句は理窟を以て構成されてると言つたが一方から見ればさうかも知れぬ。前の句もこの句も理窟かも知れぬ。しかしいくら理窟でもこの句のやうに組立てられたのは面白い。

春の句

霞む日や夕山蔭の飴の笛　一茶

うら〳〵と霞んだ日の夕、山蔭の里に飴屋の笛が聞える、長閑であつて、そしてどことなく悲哀な感を含んだ句である。あまりに長閑な春の日は、靜な月の夜に起ると同じやうな悲みを起させるものである。しかも夕である。しかも山が近い。そこに飴屋の笛が聞えるのである。あの飴屋の笛といふものが實に哀調である。暖かさについウト〳〵と坐睡をして、目が覺めた時、非常に遠い〳〵所で、飴屋の笛が聞えると、僕などは泣きたくなるやうな氣がする。月夜の按摩の笛より遙に意味が深いやうに思はれる。

俳句評釋

諸國一見の僧はるゞと霞みけり　　恩佛

たゞ行脚の僧が遠く行くのが霞んで見えるのであるが、それを能の「是は諸國一見の僧にて候」などゝいふ、その言葉を借りていつたので、能そのものを聯想させて、一層長閑な春らしい感を起させてゐる所が、この句の働きである。

衰へや齒に食ひあてし海苔の砂　　芭蕉

人口に膾炙してゐる句である。海苔には砂がよくある、若い時はそんなものは一向に苦にもならず、無造作に食つたが、年寄つて齒が弱つて來ると、その小さな砂が齒に當つてもハッと思ふ。その時あゝ乃公も年が寄つたと感じた

刹那の句である。極めて微細な事で歎老の意が發してゐる。

僕が或夜、電車に乘つた。すると目を驚かす計りの美女が僕の隣席にヒタと腰掛けた。香水の香、白粉の香、ショールの白、リボンの紅、指環の金、これ等が入り亂れて僕に近く動くのである。この時僕は、近頃電車で美人の擬徒が稼ぐ、といふことを誰かに聞いたことを思ひ出して、急いで洋服のボタンを悉くかけた。さて電車を降りてから、今少し若かりせば、彼の美に憧憬して、何等の疑をも起さなかつたらうがボタンをかけるだけ僕は年をとつたわい。懷手をして財布をしつかり握りつゝ花を見ると同格で、甚だ散文的だ、

春の句

俳句評釋

と思つて獨笑みをしたが、その後この事を友に話したら、友は「衰へやだねえ」といつて冷笑した。とんだ所でこの句を使つたものである。また僕はとんだ所でとんだ話を書いたものである。

初午や馬鹿が見て居る馬鹿踊　　洒竹

初午の趣は陽氣なものゝ、極めて輕い所にある。太祇の「初午や借馬で走る人の中」の如きも馬に乘つて人中を分けて行くのであるが、その馬が借馬である所に初午の輕みがある。この陽氣な輕みには間の抜けたことがよくはまる。芭蕉の「初午に狐の剃りし頭哉」の如きも間の抜けたところが初午らしい。この句もその間の抜けた景趣を捕へたので、初午の頃には、まだ浮かれる程の時でも無い。それに馬鹿踊をボンヤリと立つて、風に吹かれながら見て居る人はいかにも馬鹿げて見える。そこを言つたので、輕妙なところ實に初午的である。初午の句などは作り惡いものであるうまく出來ると、他の作りよい句をうまく作つたよりも面白い句が出來る。

春の句

春風や肩に乘る子の振鼓（ふりつづみ）　　闌更

可愛らしい兒が肩車に乘つて居る。其の子が振鼓を玩んで居るが、それに春風が吹いて居る、といふので。

俳句評釋

元來、春風はよく子供に調和する。玩弄品も調和する。殊に振鼓はよく調和する、と思ふ。さういへば振鼓は近頃東京では稀になつたやうだ。この頃の玩弄品は多くブリキ細工だから、いやにギチ〳〵して居る。ブリキの電車やブリキの兵隊さんは、寧ろ夏の日盛に調和するかも知れん。

この句の趣は何だか古い江戸繪を見るやうである。

繪草紙に鎮置く店や春の風　凡董

繪草紙屋の店。濃丹濃青相映發して、子女の目を惹いて居る。折からの春風が其店へ吹き込むので、吹き飛ばないやうに鎮即ち重しが所々に置いてある。鎮置くとあるから、あまり狹い町では無くて、打開いて快濶な大通りの店であるらしく、暖かな春の日ざしも十分に受けて居るらしい。

繪草紙屋が春風に調和すれば、今日流行の畫はがき屋も無論春風に調和する。その趣を描いた句も折々耳にする。

春の夜や風の取れたる濱の松　双鳥

濱の松といへば、いつも強い風に吹かれ通しで、松風の音を立てゝ居ないとは稀で、枝の樣幹の工合も風の爲に一方へ曲つて居るものである。然るにこの句に描したのは、その濱の松が風に吹かれて居ない時である。默して居る時である。月朧なる春の夜、龍宮の管絃も聞ゆべき長閑に靜

な春の濱邊、立並んで居る松にも風が更に無い。といふ極めて平和な夜景である。

この句で用語の巧なのは「取れたる」である。「取れた」といふのは、今まで附着いて居たものがポツリと取れたのである。濱松にはいつも風が附き物であるのが、この靜な夜、全くその風が取れてしまつたのである。有るべきものが無いといふ感じがこの一語に現はれて居て、一層靜に思はれるのである。

燕や三十三間堂の雨　酒竹

燕は古い家の軒に巣くふものであるから、古びのある所

に調和する。京の三十三間堂、隨分古い建物である。中は薄暗くて無數の佛像が重なつて並んでござる。古びが滋み」がついて詩趣が愈深い。其處へ春雨が降つて居るので、更に「沈れて居る場所である、其處へ春雨が降つて居るのである。其時其所を縱横に翔りつゝあるのが燕である。そこで美しい統一の妙があるのである。

前述の如く燕は「古び」に調和するから、老舗の呉服屋に配した句もある。藥屋に配したのもある。昔風の旅籠屋に配したのもある。土地では大和、京都を配したのが最も多いやうである。この句も京都である。

燕はツバメともいひ、ツバクラともいひ、ツバクラメともいふ。かういふやうな字數の自由になるものは、俳句のや

俳句評釋

うな短詩に入れるには大變に便利である。

蝶々や女の道のあとやさき　千代

女が歩いて行く、それに蝶が附きまつはつて飛んで行く景色で、言平淡にして、意甚だ濃厚である。千代の妙手腕はこの句にもよく現れて居る。女に蝶を配するといふと必ずしも新しくは無いが「道のあとやさき」といふ所が巧である。

この頃巴里で、女が生きた蝶を糸で頭につないで、夜會等で、おのが行く所へ絶えず蝶が附いて來て頭の邊を飛びめぐる樣に見せることが流行してるといふことが、新聞か何かに出て居たが、實に殺風景極まる。すべて強ふるといふ事は趣味をぶちこはすものである。蝶に絶えず續けと命ずるは強ふるのである。この句で歌つた景趣のやうに、蝶が勝手に附いて來るといふので無くては趣が無い。

春の句

蝶々やふつと出て來る雨上り　烏明

春雨が霽れて、水溜りに日が美しう映る、隣りの內儀が早速洗濯物に取かゝつた、お向うの娘が濡れた傘をすぼめて御稽古から歸つて來た、內儀は「いゝお天氣になりましたね え」と聲をかける。この時忽然として蝶がひら〳〵と飛んで來た。降つてるうち何處かに隱れて居て、霽るゝ遲しと

飛び出した有樣である。この「ふつと」が生命で、蝶の出やうの突然なとも見え、雨上りと照應もして居る。

○長閑さや障子にあたる虻の音　里十

閉めきつた障子に、午過の日影が一杯に暖くあたつて居る。お婆さんは新聞小說を長くかゝつて小聲に讀んで居る。嫁が傍で茶道具を出して、最中を皿に體よく盛つて、鐵瓶の鳴るのを待つて居る。虻が一匹ブーン〳〵と唸りながら、障子に突當り〳〵して、穴があらば座敷へ舞ひ込まうと苛つて居る。

虻は蝶などゝ違つて甚だ殺伐なものであるが、あの羽の音が紙鳶のウナリのやうに長閑な感じを與へるのである。又同じ處を長く去らずに唸つて居るところが愚に見えて疎み難い趣がある。

陽炎を寂しき物と知らざりき　士朗

春の晴れた日に、地が十分に溫められて盛に蒸發氣が立つ、それがチラ〳〵チラ〳〵と動くのが見える、これが陽炎である。陽炎は陽氣なもので、賑やかなもので、あるが併し獨り坐して徒然と庭の陽炎を見て居る折などには、それがいかにも寂しく見える。この句はこんな時につく〴〵と陽炎を見て今までは知らなかつたが、寂しいものだ、と悟つ

た時の吟であらう。句の體が散文のやうであるが、かういふ趣をいふにはこんな言ひ樣が却てよい。配合される物が賑やかな場合が多いから、陽炎も賑やかなやうに思ふが陽炎そのものは確に寂しいものと僕も思ふ。有るか無きかわからぬものである、音の無いものである、靜な日に多く立つものである、淺薄なものでは無うて深玄なものである、神秘的の性を帶んだものである。古い寺の瓦が落ちて居る邊に陽炎が立つて居たら陽炎の性質は一層明かになる、秋の景物のみを寂しいやうに人は言ふが、春の景物にも寂しいものが多い。長閑なといふことが既に寂しい。霞む日に遊子郷を望むのは、秋風に父母を偲ぶのと同じ程度に

寂びしみがある。陽炎を見詰めて居るのと、露を見詰めて居るのと厭世に似た感情の湧く程度は同じである。最も華やかな櫻に對しても、芭蕉は「さま〳〵の事思ひ出す櫻かな」と吟じたでは無いか。

陽炎や蕎麥屋が前の箸の山　一茶

蕎麥屋で箸を洗つて、店先へ山のやうに盛りあげて乾しておく、そこに陽炎がチラ〳〵と立づて居る、といふ景色。まづは賑やかな趣の方である。「箸の山」といふ造語も面白い。これを眞似て或人が「陽炎や風呂屋の前の桶の山」とやらかしたが、どうもこれでは優しみが缺ける。やはり小さ

い箸の方が陽炎によく適する。この邊の呼吸に俳味の妙がある。

出代の疊に落す涙かな　太祇

出代せむとて下女が暇乞をする時に涙を落したといふだけに見ては詰らぬ。「疊に落す」といふ所を味はねばならぬ、涙に袖を濡らす、膝にこぼすといふのが、まづ普通であるが、疊に落すといふのは、はしたない樣である、露骨な樣である。そこに「下女の落涙」が寫生されて居る。そのはしたない露骨な所に、袖や膝を濡らすよりも一層人を動かすものがあるのである。

出代の更に醜きが來たりけり　虚子

今まで使つて居た下婢は實に醜婦であつたが、今度出代ることになつた。今度はちつと小奇麗なのが來てくれゝばよいがと思つて居ると、前よりも更に醜いのが遣つて來た、といふのである。「更に」が使ひ得て妙である。

灯ともせば打重なりぬ雛の影　指鴻

灯をつけたれば、大きい小さい色々の雛の影が重なつてうつつた、といふ細かい優美な景趣。子規子の句に「雛の影桃の影壁に重なりぬ」といふのがあるが似たものである。但し影で灯を聞かせておいて、灯をともすといふことを省い

て、其代り桃の影まで添へたのは、子規子の方が怜悧かも知れぬ。

○土筆我に昔の我見ゆる　太祇

幽玄にして、感慨無量の句である。土筆の生へて居るのを見ると自分の幼時の姿が目前に髣髴として、友達と一處に土筆を摘んで遊んで居るのが見える。これは自分の幻覺で、人には見えぬ、我のみに見える、といふ意味も、自分の姿が怪しくも自分に見える、といふ意味も、「我に」の語に含まれて居る。

僕は今なほ郷里の城の石垣のあたりへ土筆を摘みに行つた幼時をよく記憶して居る。友達が駄菓子を袋に入れて持つて來てゐたと、僕が草履の鼻緒を切らしたが紙片が無くて困つたと、などをよく今も記憶して居る。又中村へ遠足に行つて、豐太閤の社前で先生と一處に辨當をつかつたが、其處ら一面に土筆が生へて居たともよく記憶して居る。土筆、茅花等は鋭く幼時を回想せしめるものである。

故郷にこんな道あり春の草　道彦

春草離々たる田舍道を獨り辿つて居て、ふと、故郷にも丁度かういふ風な所がある、と思つた、四邊の光景の類似から望郷の念を惹起したのである。

俳句評釋

轍（わだち）〳〵雨の菜の花流れぬる　曉臺

泥濘を車が通つた痕が幾筋も付いて居る。雨はなほ頻りに降つて居る。菜の花が散つて、そこに流れてゐる。といふ汚ないうちに美しい所のある複雜な趣を描いたのである。これは畫には書けない景色である。地面のみを寫したのが面白い。轍〳〵と云つて幾筋も印されて居るのを現したのも面白い。

雛見世の灯をひく頃や春の雨　蕪村

きらびやかな雛見世が、夜が更けたので今店を閉ぢようとして、灯をひく、その頃に外は春雨が音も無く降つて來たといふ景色。陽氣なやうな、しめやかなやうな樣が春雨そのものゝ味をよく現はしてゐる。

春雨や蜘蛛這ふ夜の硯箱　保吉

春雨のしめやかに降る夜、机に凭れて居ると、硯箱の上へ蜘蛛が這ひ出た、といふ。蜘蛛の這つて來たといふのに陽（イン）氣な趣が強く見えて居る、（確にこれでは言ひ足りぬと僕も思ふが、何といつたらよいかこの趣を說明する法を見出さぬ。）

春の水ところ〳〵に見ゆる哉　鬼貫

俳句評釋

高い處から春の野を見わたした景。池や川などが所々に見えて、春日に映じて美しく燦いて居る。巧を弄せずして廣い長閑な景がありゝと描いてある。

春の海終日のたりゝ哉　蕪村

これは人口に膾炙されてる句であるが、諸君の中には、こんな平凡な句がどこがよいか、と疑はれる方があるでせう。いろゝな材料が組合つてる句は賑やかで、面白いやうに見え、材料の單純なのは、一寸見には平凡で弱い句のやうに見えるものである。併し單純な句ほど老巧な手腕を要するのである。俳諧は取合せ物だと古俳人は言つたが、取合

せるのみが俳諧の能では決して無い。この句は春の海の句で、春の海の事のみを言つて、何の取合せ物も無い。併しそこに春の海のおほどかな樣があるのである。取合せ物があれば却て趣を狹くする、コセゝさせる。たゞゝ「のたりゝ」して居ると云放つたところに、見て居ると恍惚として氣が遠くなるやうな春の海の樣が見えるのである。「のたりゝ」といふ語もよく出來て居る。

春の句

膨れあがる春の大濤や鷗飛ぶ　霽月

僕はこの「膨れあがる」にスッカリ惚れちまつた。長閑な春の海、濤の立ち方も極めて穩かで鷹揚で、ムクーリと膨れ

あがる。その上を鴎が飛んでるといふのである。この「膨れ上る」といふ語が春濤の有樣を遺憾なく描き盡してゐる寫し盡してゐる。この語の妙味をよく〳〵味はつて貰ひたい、繰反し吟じて味はつて貰ひたい。

永き日を羽織着ながら寢たりけり　凡董

暖かい春の日永に、何處かで普請の木遣をやつてるのを聞きながら、書見をして居るうちに、眠氣がさして來たので羽織着た儘で寢てしまつた。といふだらしの無い日永の有樣である。

僕はもう長く「永き日」といふ感を起したことが無い。東京では餘程年老つた人でゃも無ければ日が永いといふことは感ずることが出來ぬ。晝も夜も一寸の暇も無い。普通の生活をして行く爲に大なる勞力を拂はねばならぬ。其外に絶えず己が素養に勉めて居ないと見る〳〵人後に落ちてしまふ。だから時の不足を常に感ずる、睡眠をしなければならぬといふ人間の身を口惜しくまで思ふ。花の咲くのを待つといふことは無い。花に咲かれて此方がいつも驚かされる。四季の景物はやけに回した走馬燈のやうに見て居られぬ程速く循環して行つてしまふ。斯る處に居て誰か春の日永にごろ寢をして居る者があらう。僕は俳席で「日永」といふ題を得る毎に、父母の膝下に居た幼時の春日

俳句評釋

の感を再起させて辛つと句案をするのである。

日永しと獨り思ふや鳩の聲　　蒼虬

廣く清げな社務所に、神官が唯一人留守をして居る。桐火桶を撫でながら「あゝ日が永い」と思つて居る。境内は深夜の如く靜で、折々鳥居の邊で鳩の聲がするばかり。尤もこの句を神社の景趣と定める必要は無い。

僕が嘗て教師をして居た田舍の學校で、宿直番を報ずる爲に、厚紙に「宿直」と書いた札が作つてあつて、小使が小使室にある宿直順番を見て、毎朝その當番の教師の机の上へこの札を載せて置く、といふ定めであつた。この札が僕の處

つて來た時、あまり汚ないので「どうですこの札を新しい一寸趣味のあるものに改めようぢやありませんか」といふと、數學の教師は「また趣味が出た」と笑ふ、圖畫の教師はこれを遮つて「僕が一つ意匠をして見ませう」と言つて、早速小使に新しく札を作らせた。休日に宿直する卽ち晝の宿直のと並の夜の宿直のと二枚作らせた。そして圖畫の教師が俳畫めいたものを描いた。その晝札の方に僕が惡筆を揮つてこの句を書いた。「鳩の聲」が大に利いてると言つて皆が感服した。夜宿直室で煎餅蒲團に包被つて寢るのも厭だが、天氣の宜い日曜などに終日籠城の義務を背負はされるのゝ方が大に辛いので、この札が巡つて來ると、また「鳩

春の句

の聲」が來やがつた』と皆が呟くのであつた。

永き日の獅子の香爐や火の消えし　吾空

壯麗な書院の光景が目に浮ぶ。獅子の香爐から細い煙が緩やかに立昇つて居る。それを亂す風も無い。やがて横に棚引いて天井に沿うて伸びる、その端が室外へ出て春の日の影に觸れてパッと紫に輝いて散り去るのである。そのうちに何時(いつ)となく煙が見えなくなつて、香も聞こえずなつたのに氣が付いてふと振返つて見ると火が消えて居た。といふその時の感である。かゝる室には、かゝる室に居る人には、永い日が殊に永いのであらう。

分け入りて川上(かみ)寒し花に鳥　重厚

春江に棹して逸興禁ぜず、追々と流に溯つて行くと、水は漸く狹くなり兩岸は山になつて漸く相近づく。水に舟無く岸に人無く、山氣我を襲つて、そゞろ寒きを覺ゆる處、松杉の木の間に眞白な山櫻が咲きこぼれて我は顔に鳥の囀るのが聞こえる。

「花に鳥」の鳥は嶄新で無いやうに見えるけれども、この句に於てのこの「鳥」は大に力があつて、人氣(ひとけ)の無いことを示して居る。「寒し」も自ら人寰で無い趣を深くして居る。

鳶の輪の崩れて入るや山櫻　丈草

櫻花爛漫たる山の空高く、鳶が晴を喜んで大きく輪を劃しつゝ飛んで居る。段々と其の輪が低くなり小さくなり終に輪を亂して矢の如く櫻雲の中へ入つた。

作者の位置はこの櫻のある處からは距つて居て、櫻を斜に仰いで見るべき處であるらしい。「崩れて入る」の語が活いて居る。

ポートレース堤は花の嵐かな　想佛

諸君御存じの向島の競漕。合圖の銃聲と共に數隻の端艇は櫂の翼に水を切つて飛ぶ。押並んだ堤の人は躍り上り手を振つて「赤ア」「青オ」と叫ぶ。折柄の筑波颪に長堤の櫻は、吹雪と狂つて空に舞ひ川に流れる。

向島の花盛は實にこの一句に盡きて居る。この光景を田舍へ報せてやるには、下手な畫葉書を送るよりはこの一句を送つた方が、想像を明かにさせ得ると信ずる。「ボートレース」といふ語も引音が二つもある爲に陽氣に響いてよい。

花の雨霽るゝ遲しとをどけ出づ　是因

雜誌の口繪に折々出てゐる假裝行列のやうな趣向を凝らして、明日こそワッと云はせようと、用意をさ〳〵怠り無つたが其日の朝起きて見ると無情の雨、大に失望して天を

俳句評釋

怨んで居ると、正午近くになつて忽ち雲が切れて日が射す「ゑめた」と叫んで、泥濘も構はず三味線面白く押出したところである。江戸ッ兒の無邪氣な樣、文學者先生に言はせれば快濶なる日本國民の性情が、一句に躍如としてゐる。「をどけ出づ」が面白い。

家ありや夕山櫻灯の洩るゝ　闌更

櫻狩の歸るさかとも思はれるが、寧ろ春の山路に行き暮れた旅人の見た景色と思つた方が當つては居まいか。夕靄が濃く低れて花の色も微かならむとする時、その花の木の間に灯が見える。こんな深山にも家がある、或は花守の

家では有るまいかとも思はれる。

この「家ありや」を輕く見れば、こんな風に解せずともよいが、僕はこれを重く見たから、即ち家のあるのが意外に感せられる意に取つたから、かういふ樣に解釋したのである。

友易へて再び出たり夕櫻　宜麥

友と終日花に浮かれまはつて歸つたが、どうも夕景を見ないのは殘念だと思つて、疲れてるのも構はず、又外の友を誘つて出かけた。といふ風士の樣である。垂れ籠めて春の行方知らぬも哀深きには相違ないが。まづ大抵の人は春の盛りに落着いて坐つてることが出來ぬものである。

俳句評釋

夜の花寂しいか香の人を引く　右雄

晝間は花見客が集るので賑やかだが、夜になると靜になつてしまふので、花も寂しいと見えて人を引き寄せる爲に芳香を發つ、といふので。かう思ふのも、晝は花の色に氣を奪はれて居るので解らぬが、夜になると香に氣が付くからでもある。櫻の中には匂櫻と言つて香の高いものもあるが、普通の種類のでも澤山咲いてる所へ行くと、清淡な香が漂つてるものである。

僕が、何才位の時であつたか、なんでも小學校、今でいへば尋常小學校の時代であつた。父が松櫻軒といふ茶亭へ行くのに隨いて行つたことがある。東別院の櫻を見てから、前

津の田甫道へかゝると、日が暮れ方になつて蛙の聲が遠近に聞える。前津といふのは名古屋の東の町外れで、也有の住んで居た所である。この邊は別莊や茶亭が多いので、名古屋式の趣味が溢れて居る。松櫻軒といふのも此處にあるので、さて軒の門を入つて茶室に通つて抹茶を飲んでから父と主翁とが暫時話をして居る。頓て主翁が障子を開けると、庭の池の傍に大きな糸垂櫻が滿開してゐる、其の下で、男が篝を焚き始めた。火が盛んに燃え立つと櫻は薄赤く暗の空に浮いて見える。父は深く主翁の厚意を謝し、それから、有栖川宮樣が此亭に宿られた時にこの櫻をお詠みになつた短冊を拜見して、さて歸らうと庭へ下り立つ。篝

はこの時消えて居たので、主翁は提灯を持つて送つて來る。飛石傳ひに其の櫻の下を通る時、幽かな香が我々を引留むるやうに馨つた。この夜の優雅な趣は子供心にも深く刻まれたと見えて、今も歴々と目に浮んで來て、かう書いて居ても恍惚として來るのである。

夜に入つて空を離るゝ櫻哉　竹冷

咲き滿ちて居る櫻を仰いで居ると、それは地から生ひ立つたものでは無くて、大空に附いてるやうに思はれる。それが夜になると、空が暗くなつて櫻は下の火影に照らされるので、空と櫻の間が遠ざかる、といふ感がある。大まかな面白い句である。

電氣燈の下に咲いたる櫻哉　哉

「たゞ事」過ぎると思ふ人があるかも知れぬが、風情がある明治式の風情がある、上野動物園前あたり、電燈が高く輝いて、下に咲いてる一面の花は淡紫を帶んで見える、仰いで細かに見ると、上の花瓣の陰影が紫ばんで下の花瓣に映つて居る美しさ。篝などの赤い光で見たのや朧月の黄いろい光で見るのとは全く別の趣がある。人麿でも、業平でも清少納言でも、西行でも、芭蕉でも、この趣は知らずに死んでしまつた不幸な輩である。電氣燈は世界の文明國に輝いて

俳句評釋

は居るが、其の光が花の中の最も艶なる櫻を照らす時に如何なる觀を呈せしめるかといふことは、日本を見ない人には解らぬ。日本を見ない外國人はこの點に於て不幸な輩である。コンノート殿下が日本の櫻を見ずに歸られたのは殘念であつた。富士を見ず櫻を見なくては日本を見たとは云はれない。

白髭の神燈細し花の雨　碧玲瓏

花時には吾妻橋の傍に白髭行きの小舟が客を待つて居る、ひとしほを混ずる東京人のことて、「しらしげゆき」又は「ひらしげゆき」などゝ書いた旗を立てゝ居る。御手輕連はこれに乘つて白髭まで岸の櫻を仰ぎながら行つて、其處で堤へ上つて、花の間を通つて元の吾妻橋の方へ歸るのである。向島で人の雜踏するのはまづ白髭までゞ、其れを越しては花を見る人が甚でも少ない。殊に夜、殊に雨夜、白髭あたりは人も無くたゞ神燈が幽かに花を照らして居る、といふ寂しい花を描いたのである。

人戀ひし灯ともし頃を櫻散る　白雄

緣に出て獨り庭の櫻を眺めて居る、遠く鐘が聞え、烏が二三羽空を通つて暖かい星が光り始めて、灯をともすべき時になる。その時風も無いのにチラ〳〵と花が散る。何と

俳句評釋

もいへぬ寂しさを感じて誰か來て呉れないかと、しみじみ思はれるのである。

俳友野梅君がこの句を頻りに賞めて吟じて居られたが僕は『平凡だ、「人戀し」と「灯ともし」とアリテレーションになつてる位が目付けどころだ』と貶して居たが、この頃思ふと、成程よい句だと感じて來た。

布子着て夏よりは暑し桃の花　支考

布子は綿布の綿入。桃の花の咲いて居る頃布子を着て居ると實に暑いといふだけのことであるが、桃の花のやうな濃い厚い趣のものに對して、春の暑苦しさがよく調和して

る。「夏よりは暑し」と思切つて言つたところに買つてやるべき價値がある。

桃の花散らけて見れば美しき　とみ

これは八才の女子の吟である。作つた所が無くてしかも妙味がある。子供が花を拐つて散らけた時の感を其儘言ひ放つたのであるが、櫻は子供の弄ぶのには餘りに弱い殊に女の子が散らけるのには濃厚な桃の花が動かぬ所である。

連翹にいと荒き垣の結ひやうや　虚子

春の句

俳句評釋

連翹は嚴めしい家には適せぬ。町外れか小村の家の垣に咲いてるのが面白い、その垣も荒く結つてあつて内が見透かされるやうな處が特に面白い。「いと荒き垣の結ひやうや」の調が嬉しくて耐らぬ。

藤の花南無妙法蓮華經と咲きにけり　野梅

藤の花が左右へいくつも腕を延して長く垂れてる樣を題目の書きぶりに見立てたのである。奇拔な句である。或人が『あまり變挺だ、南無妙法と咲きにけり」と遣つたら、如何だ』と言つたら、野梅君が『それでは藤の花が短かくなつてしまふ』と答へたのは面白かつた。僕は原案に贊成します。

藤の花人の守らぬ砦かな　虛子

守り手の無い砦のあたりの木に、藤が纏ひ付いて咲いて居る樣であらう。柵に作つてあるのでは決して無い。僕の鄕里の邊でも東京でも藤といへば必ず柵に作られてるものに定つて居るので、どうも平板で深い面白味が無いから、僕はこの花を好かなかつたが、伊賀伊勢をまはつた時に松や杉に高く纏つて咲いてる藤を見て、藤は斯くして始めて其の眞趣が顯れる、と思つた。殊に伊賀の藤堂の城跡に斯る藤を見たのは、この句其儘の景色であつた。

春の句

行く春や重たき琵琶の抱き心　蕪村

老法師でゝもあらうか、もう春が行くかと悵然として、感を四絃に言はせようと琵琶を抱いたが、春の別に力無く、常より重い心地がするのである。

第二章　夏の句

初袷ふいと出て行く息子哉　　小波

夏に入つて、綿入を脱いで始めて袷を着る、それが初袷である。「息子」といへば、まづ商家の若旦那と想はれる。

長雨がやつと今朝霽れてから、めつきり夏景色になつて、向家に氷屋の新しい旗が出るといふ日、元來仕事嫌ひで遊び好きで、川柳點で「律義息子汁かけ飯を食うて居る」と言はれるやうなので無くて、三遊亭の誰かゝ演る「よかちよろ」の主人公のやうな息子、さつぱりした袷に着替へて、帳場に座つたと思ふと、突然「オイ太助一寸出掛けるよ」と云棄てゝ出て行つた。番頭太助後見送つて慨然として曰く、「困つたものだ、また横町の師匠ん處へ、はあちやんの顔を見に行つたんだらう、道理で今朝の朝湯が長かつたわい。」

初袷を着ると俄に身輕になつて氣も輕くなつて、つい出掛けて見たくなるものだ。斯ういふ息子などは、とても帳場には落着いて居られぬであらう。面白い所を見付けたものだ、濱町式の句とでもいはうか。

俳句評釋

强弓を引きしぼりたる袷かな　子規

同じ袷でもこれは前のとは反對、眞の男性的な、骨の太い男、新綠滴るが如き矢場で、袷姿凛々しく、强い弓を小氣味よく引きしぼつた光景。朝風が爽かに吹いて、練兵場の馬のいなきを傳へる。前の句とこれと柔と剛の差はあるが、袷の活動的趣味を寫したのは同じである。

筍や稚子の齒ぐきの美しき　嵐雪

齒莖の美しい稚子が筍を食つてゐるのである。枕草紙の「あてなるもの」に「いみじう美しき兒の覆盆子食ひたる」とあるのも、兒の物を食ふ美を寫したものである。稚子が筍

を食ふ樣は「あてなるもの」では無くて、清きもの、こゝちよきものである。「齒莖の美しき」とあるから、その稚子の鼻汁垂小僧で無いことが解る。可愛らしい子が可愛らしい食物なる筍を食つてる所が美なのである。

竹の子や二本並びて朝の月　寸來

竹の子が二本並んで生えて居る、其上に朝の月が殘つて居る、といふ清らかな、あつさりした景。

蕪村の句に「五月雨や大河を前に家二軒」といふのがある。又同じ人の「河骨の二もと咲くや雨の中」といふのがある。士朗の句に「若竹や二本になりし庵の軒」といふのがある。

夏の句

俳句評釋

この二つ同じものが並んで居るといふ事其事に一の趣がある。有情的に見れば男女が並んで居るのを見ると同じやうに、互に頼りになり合つて互に寂しさを慰められて睦じくして居るやうに思はれる。非情的に見れば、左右相稱になつて釣合ひが取れてるから美しく感せられるのであらう。この句の景の如き「二本」といふのが動かぬ所で、一本や三本以上では顯はせない趣がある。

町淋し雨の筍貸家札　飄亭

これは荒涼なる筍を描いたのである。人通りの少い町を雨のしと〳〵と降る日に通る。とある藪に筍が汚なく

生えて居る、その傍の家は戸が閉つて貸家札が斜に張つてある、宿無し犬が軒下に圓くなつて居る。小石川の奥あたりにありさうな景色である。

方百里雨雲寄せぬ牡丹かな　蕪村

牡丹は花の中で最も威力のあるものである。彼が傲然として其盛麗なる色彩を輝かして居る爲に、百里四方の空には雨雲も憚つて寄せて來ぬ。

牡丹の壯麗な樣を極端に誇張したのであるが、「方百里」は餘り廣過ぎて寧滑稽の感があるとも思はれる。しかし更に思ふと、大空見る限り雨雲無しといふ景を寫すには方一

俳句評釋

里や方十里では無効だ。やはり方百里といはねばならぬ、百とか千とか萬とかいふ多數は拙く使ふとたゞ痴嚇に陷るから注意せねばならぬ。

この露に鏡研かばや白牡丹　馬耳

佛壇と神棚と比してどちらが清淨な感を起させるかといふに、無論神棚の方である。佛壇の金ピカは濃厚であるから清淨の感を起させ得ぬのである。まづ普通濃厚で清淨なものは無い。梅、水仙などは恬淡であるから清淨であるが、牡丹は濃厚の極であるから清淨で無い。しかし牡丹には白いのがある、白は清淨であるだから白牡丹は濃厚で

ありながら清淨の感を起させ得る。この句にいふ鏡は神鏡などでは無くて、普通の化粧用の鏡であらう、化粧用といふとは濃厚であるが鏡の光そのものは清淨であるから、鏡は濃厚でありながら清淨の感を起させ得る。

露を帶んだ白牡丹を見て、この露で鏡を研がうと思つたといふことが美しく自然に感せられるのは如上の相似があるからであらう。併しこんな理窟責めに句を味ふのは良くないことであるが、句を解く上にはこんな事を言はねばならぬ場合がある。

夏の句

散る傍に牡丹の魂の迷ふ哉　紅葉

俳句評釋

牡丹が散る、その傍にその花の靈魂がさ迷つて居るといふ幻怪なる想像である。牡丹のやうな濃厚な花は散つても散つたきりで無く、執念が殘つて、迷つて居さうに思はれる。この想像は決して不自然では無い。珍らしい句である。

卯の花や曉の風月を吹く　大江丸

前の竹の子の句と同樣あつさりした景趣である。垣に卯の花が咲いて居る、月が殘つて居る、冷たい曉の風が月に吹いて居る。卯の花は晝間見るよりは、朝か暮か薄暗い時に見る方が趣がある。夜も趣がある。卯の花の句でよいのは大抵晝間のでは無い。

夏の句

裏吹いて折々白き若葉かな　沙羅

綠鮮やかな若葉に折々風が渡ると、比較的白い裏が見える、その潔い景を描いたのである。この「裏吹いて」といふのが說明めいて妙で無い、何とか改めたい心持がする。風が吹いて折々若葉が白く見えるといふ意味だけでも、裏吹きかへす樣だなとは誰にも解る。言はずとも解ることをしかも第一に言つたのが興を殺ぐ、それがこの句の缺點であるが、風情は買ふべし。

俳句評釋

兩岸の若葉迫りて船早し　虛子

細い溪流であらう。兩岸の若葉が押冠るやうに相近づいて、水に綠を流して居る。上も下も皆綠の光である、そこを矢を射る如く舟が走る、といふ快適の趣である。

君達の手習の間や若楓　涼兎

楓の若葉が若楓である。貴人の子息が君達である。君達が手習をされる部屋の前に若楓が茂つて居るといふ景色である。

若葉と若楓はまづ趣の似たものであるが、取り立てゝ若楓のみを言へば、これは一般の若葉よりは優しみがある、だから君達の手習の間といふ如き優しい美しい、そして華美ではない所によく適する。

夏の句

青簾三味線二挺かけてある　四丁

夏になつて新しく懸けた簾の青いのが青簾である。細い路次に入ると、小粋な一構があつて、青々とした簾が懸けてある。ふと覗いて見ると、三味線が二挺かけてあるのが透けて見えた。いづれ格子の中に御神燈があつて、小窓には赤硝子の風鈴が必と下つて居ようといふ家であらう。二挺かけてあるといふので、單に慰みに彈くのみの三味線で無いとが解る。

俳句評釋

郭公いまだ俳諧師なき世かな　芭蕉

樹が茂つて、雨雲が重なつて、郭公が鳴いて行く時は非常に遠い〳〵昔のやうな氣がする。儿董の「郭公古き夜明の景色かな」宇橋の「鎌倉や連歌に古き郭公」の如きも、郭公に對して古いといふ感を起したのである。この芭蕉のは、時間の束縛を脱して、己れ直に昔の人になつたので、まだ俳諧師といふものも無かつた時の人になつたのである。

自然に刺戟されて超時間的な心持になることがある。郭公の頃の景、郭公そのものゝ聲、に射られて忽ち身は昔の人たる感を芭蕉が起したのである。深い句である。

草の香の或夜頻りに杜宇　青阿

頻りに草の香のする夜に杜宇が鳴いたといふのである。闇で草を見ない、草の香のみを感ずる、しかも頻りに感ずる、暗中生氣の動くを覺える、その時杜宇が天外に叫んだのである。この暗中の生氣が杜宇と相合して人の胸を動かす。

夏の句

美しき蚊の初聲よ竹の月　太鈴

蚊のやうな憎いうるさいものも、初めて一つ鳴いて來た時は流石に面白味がある。丁度竹林の上に月が出て居るので、いよ〳〵快感を與へる。この句を讀んでこの蚊を憎む氣は決して無い。鶉衣にも「蚊は憎むべき限りながらさ

俳句評釋

すが卯月の比端居めづらしき夕べはじめてほのかに聞きたらむ又は長月の比力なく殘りたるは淋しき方もあり」である。

五月雨や湯の樋外山に煙りけり　其角

湯の樋は溫泉の湯の通る樋である。外山は奥山に對した名で、外の方の山、端の方の山の意である。この句は溫泉のある山の雨を寫したのである。

山の木立に鼠色の雲が絶えず凝つて、晝も夕暮のやうに淡暗い。山蔭に通してある湯の樋からは硫黄臭い湯氣がむら〳〵と立騰つて居る。といふ重苦しい詫しい、そして

寂しい景である。

僕はこの句を誦すると日光湯元を回想する。僕の行つた時は秋で、丁度月夜であつた。紅葉見の客は皆中禪寺から引返してしまふので、其夜湯元村のすべての宿の中、客といふのは僕と友人の二人だけで、宿の者は皆指折り數へて下山の期の來るのを待つて居る頃であつた。夜更けてから友と共に人家離れた山路を徜徉すると、木蔭を通つて居る湯の樋から白い湯氣が立つて硫黄の氣は咽ぶばかりである。雲の徂徠に月は忽ち隱れる。太古の山の如き寂寞を破つて折々物の叫ぶ聲が聞える。友に聞くと、あれは鹿が鳴くのだと言つた。あの折の景を時を變へ地勢を變へ

夏の句

俳句評釋

て考へると、此句の景趣が歴々と想像される。

五月雨の竹にはさまる在所かな　一茶

竹藪は陰鬱なものである。雨中の竹藪はいよ〳〵陰鬱である。しかも五月雨。何處を見ても光輝といふものは少しも目に觸れない、五月雨の頃の竹藪は層一層陰鬱である。その折その竹藪のこもつて居る中にある小さな村のわびしさはどんなであらう。あんな處に若い者は一人も居まい、八十か九十の爺さん婆さんばかりが住んで居るのだらうと思はれる。「はさまる」といふので如何に小さな村であるかゞ見えて居る。

五月雨や浮木に縋る蛇の殼　氷花

これも藪陰などに流れてる汚ない小川の景で、何處からか流れて來た蛇の殼が其處らに浮いてる木にからまつて居る。そのうるさい、そてし氣味の惡い樣が五月雨の趣をよく發揮して居る。

夏の句

すいと行く水際涼し飛ぶ螢　牧童

一匹の螢であらう。水際を螢が線を劃して飛んで行つた。といふ涼しい樣である。

月下に海岸に立つて長風に袂を拂はせる涼しさは陽氣な涼しさであるが、水邊に螢を見る涼しさは陰氣な涼しさ

である。螢狩りに若い女が笑ひさゞめいて居る樣でも、やはり陰氣な趣は離れない、僕が子供の時に讀んだ地獄極樂道中記とかいふ本の序の日附の下に「螢臭き草庵に記す」と書いてあつたことを記憶して居る。螢の光も螢の臭も、陰氣で冥途の話などにはよく調和する。

日露戰爭中、祝捷の爲に、田舍の或小學校が提灯行列の代りに螢行列と稱して各々螢を携へて、二重橋か何處かで萬歲を唱へて一齊に螢を放つたといふことを聞いた。この考案者は大に嶄新な趣向と誇つて居たであらうが、僕はこれを聞いて厭な氣がした。陰氣な、冥途的な螢は祝ひの際などに決して持ち出すべきもので無いと僕は思ふ。

明易き夜を泣く兒の病かな　白雄

夏の夜は短かい、それを俳句で明易き夜とも短夜ともいふ。さなきだに短い夏の夜を、この頃子供が病氣で泣き通しにする、家中の者は寢る事も出來ず、打寄つて介抱をして居る、隣近所の者はその兒を憐れとも思はず、いづれも煩くて寢られぬ、と言つて呟いて居る。病兒の親達は兒に對する心配の外に、近所へも氣兼をせねばならぬ、といふ苦しき夏の夜の光景である。

遠里の短夜殘る灯かな　不籌

夏の旅に、朝早く宿を出る時に斯ういふ景色が目に映ず

俳句評釋

る。しつとりと露の下りてる田甫道を歩いて行く。空はうす白う明けて居るが、日は昇らぬ頃。行く手遙に小村が見えて、そこに灯の影が明星のやうにちらついて居る。その灯の光は夜そのもの、殘りである、といふ見方である。

夕立のすは來る音よ森の上　太祇

見る〳〵一天掻き曇つて、烈しい風が森の木立をドッと搖ぶる、そら夕立だ、といふ壯んな景。雨未だ來らず電未だ閃かず、雷未だ鳴らず、先驅の風のみが來た時の有樣である

夏の句

夕立やひし〳〵と止む鳥の聲　李由

これも夕立の盛りを叙したのでなく、夕立の前から夕立の降り始めにかけての樣である。天氣の激變に驚いて木々の鳥が一時噪いだが、だん〴〵隱所を求めたと見えて、その聲がだん〴〵と減つて、(その減り方の急なのがひし〳〵といふので顯はれて居る)、今や一鳥の聲を聞かず、深更の寂寞に似たる時、バラリ、バラリと霰のやうな雨粒。

外を通つて居た人は皆家へ駈け込む、干物は皆片附けられる、引窓は閉められる、蟬の聲は止む、鳥の聲も止む、大雨激雷の前に暫らく起る寂寞は非常に凄いものである。西洋の詩にあつたと思ふ、靜な夜景を叙した所に、自然が或る大

俳句評釋

なる威嚇を突然人間に與へむとして居て、嚴しくそれを秘密にして居るやうな靜寂だ、といふ意味があつたのを記憶して居る。この句はこれと同じ趣がある。

暑苦しく亂れ心地や雷を聽く　子規

蒸暑くて空氣が重くて、頭を壓し附けられるやうで何だか氣が狂ひさうな時、遠雷が聞えて來た、といふので、夏の厭な感じはこの一句に盡きて居る。

蚊柱にあたりて撫でし天窓かな　長秋

蚊が軒先などに柱のやうな形に群がつて、上になり下になりして居る、それを蚊柱といふ。この蚊柱に思はず天窓を當てゝ叱驚して、くるりと撫でゝ見た、といふ滑稽。眞の柱に天窓を突當てたやうに言ひなしたのである。

夏の句

夏の夕方、橋場に雇東君を訪うた。軒に所々蚊柱が立つてる。雇東君は「一寸待ち給へ」と言つて、柄の短かい蟲捕網のやうなものを持つて來て庭へ下り立つて、それを縱横に揮つて蚊を捕られた。肥滿なる雇東君が汗を流して蚊群と闘つてるところを、座敷から見て居ると實に可笑しくて耐らなかつた。

客立つて蚊帳吊り惜む月夜かな　蓼太

俳句評釋

夏の夜、客來があつて、浮世話に時の移るを忘れた。十時過ぐる頃客は歸つた、さア蚊帳を吊つて寢ようとすると、疊へ月が淸くさし込んで居るので、むざ〳〵と寢てしまふのも惜しく、暫らく殘物の菓子を食つて、涼しさを味つて居る。

照りつける草紙の上や雲の峰　許六

雲の峰は夏の雲の重なり合つて、漢書にある奇妙な山のやうな形をして居るのをいふ。

眞黑な草紙が干してある、日は燒きつけるやうにそれを照らして、草紙は黑光りに光つて居る、其上のあたりに重々しい雲の峰が聳えて居る。そこに暑苦しい調和がある。

山僧の晝寢を覗く狸かな　奇峰

蟬の聲、溪の流れ、より閑えるものも無い山寺に、和尙さん晝寢をしてござる。そこを狸が來て覗いた。まことに世離れた樣で、そこに可笑味も交つて居る。

狸は俳味を帶んだ獸である。酒竹君が谷中で、狸を飼つて居られた事がある。狸に餌をやりながら句案をするなどは面白いとであらう。

帷子にいよゝ四角な親仁かな　一茶

四角ばつた頑固な、「今の若い奴等は」といふのが口癖の親仁が、帷子を着た姿である。帷子はピン〳〵した、いかにも

頑固なものである。四角ばつた親仁が帷子を着て、いよいよ四角ばつたといふのである。面白いとを言つたものぢやありませんか。麥人君の句に「帷子のしやちこばりたる親仁哉」といふのがあるが、この句の、思ひ切つて「四角な」とやつた方が面白いと思ふ。

蚤に起きて嬉しや月物干にあり　紅葉

蚤がせゝつて仕方が無いので、飛び起きて着物を着更へて外へ出ようとしても庭も無い陋屋だから、物干へ上つた。すると夏の月は水のやうな光を流して、晝見れば汚ない長屋の屋根なども美しう見える。遙か向うに紫の光が立つ

てるのは停車場の電燈だ。あちらに黑煙の騰つてるのは夜も休まぬ紡績會社だ。涼しくなかるべきものも悉く涼しく見える。夜明けまで此處に居ようと思つてると、下から「貴郎お風邪を召すといけませんよ」と妻の寢惚聲。

蚤飛んだ跡あと〳〵と押へけり　晩芳

そら蚤が飛んだと押へる、先きへ飛ぶ、また押へる、また先きへ飛ぶ。跡ばかり押へさせて蚤は行方も知らずなりにける有樣である。この「跡あと〳〵」に用語の妙が極めてある。

俳句評釋

貯むるとも無くて數ある扇かな　太祇

故更に扇を貯めるといふのでも無いのに、いつとなく澤山の扇が貯まつた、といふのである。どこに詩趣があるといふ人があるかも知れぬ、成程詩趣といふものは嚴しく言へば見出されぬかも知れぬが、この句のやうなのは一種の「穿ち」である。これを讀んで「成程こんなものだな」と思はれる、其處に面白味があるのである。

僕の知人が、「新聞の霧經て來たる濕り哉」鳴雪子の句だつたかと思ふ」といふ句を見て、「これはたゞ穿ちだ何等の面白味も無いぢやないか」と言つた。僕は「面白い句だ」と言つたこんなとは爭つたとて果てしが無い。「穿ち」風の句は人によつて面白くも面白くなくも思ふのである。

寢謠の尻べた叩く扇かな　一茶

何の屈托も無い爺さん、無作法に寢そべつて、ピタリ〳〵と扇で尻を叩いて拍子を取つて謠を謠つて居る、といふ太平樂な樣である。「尻べた」といふので尻を直接に叩くやうに聞えて面白い。

夏の句

碁の人のしてやつたりと團扇かな　向陽

所謂太平の逸民が碁を圍んで居る。一人が大分苦戰に陷つて首を傾けながら、恐る〳〵石を置いてるうち、一方の

血路を開いて、局面一變、却て敵を死地に導き得て心で「占めた」と叫んで、はた〳〵と團扇を使つて息を入た樣で、ある。「してやつたりと團扇かな」いかにも得意の樣子が躍如として居る。

日傘持ちて二階に上る同居かな　呂舟

食ひ詰めて今は他人の二階に同居の先生、日盛りを俥にも乘らず歩いて來て、汚ない浴衣の背中に地圖のやうに汗を出して、「只今」と內儀に挨拶して、日傘持つた儘あたふたと二階の本陣に引上げる憐れな樣子です。日傘を下へ置くことを遠慮して、二階の部屋へ持ち込むところが小心を顯はして居る。

夏帽や故郷を望む舟の中　格堂

鍔廣の夏帽、海老茶のリボン、三柏の徽章、あらい紺飛白、白袴で、甲板に突立つて向うを望んで居る。故郷の山が漸次近づく、朧氣ながら人家も見えて來る、あゝ誰が迎ひに來てるだらうと喜びに胸が躍つて、低聲に「ホーム」の詩を吟ずる。

蝙蝠に手元も暗し油賣　北枝

油賣が油を賣て居る、其油を量て居る手元も暗い迄に日が暮れかゝる、その邊を蝙蝠が彼方此方と飛んで居る、星が

俳句評釋

一つ二つ煌いて、路次の奥から蚊遣の烟が立騰つて居る頃の景色である、一體油賣といふものは他の物賣のやうに敏活に回つてはいけない、一軒賣れば其處で車を下して世間話をして居る、其れを見て近所の内儀が、ア宅も油が切れかゝつてるなどゝ氣が附いて買ひに來るといふ工合で、話込んで恐圖々々してればしてる程賣行が良いさうである、雜談をして歩くことを「油を賣る」といふのも此れからださうな。油賣といふものゝ性質が斯ういふものだから「手元も暗し」といふのが自然で、從て蝙蝠との調和も善いのだ。

夏菊に日臭き蒲團叩きけり　鶯笠

夏の句

炎天に蒲團を干して置いて、頓て乾き切つて日臭くなつたのを叩いて、塵を拂つて仕舞はうとする、其邊に夏菊が咲いて居るといふ景である。日臭いとか日向臭いといふのは汚れた蒲團や着物などが日に乾くと、一種の乾いた臭氣がするのをいふ。夏菊といふものは秋の菊のやうな優しみが無い、暑い日に平氣で咲いて居る、むさくるしい暑苦しいものにも調和するものである。「夏菊と干蒲團」、かう云つた丈でも夏の景の或部分を明瞭に發揮して居る。僕が「夏菊や馬の尿のほとばしり」といふ句を作つたことがある、汚ない句であるが、夏菊の句にはなつて居る積りだ。

俳句評釋

此頃の蝶さへ黑き暑かな　蓼太

暑中になると見る物聞く物悉く暑い、春から夏の初へかけては白や黄の小さい可愛らしい蝶が飛んで來たが、この頃になると、飛んで來る蝶も、黑い、込み入つた摸樣のある、氣味の惡い程大きな蝶が來る、いかにも暑苦しいといふ意である。白とか黄とかいふ色は淡洒として心持の善いものであるが、黑とか赤とかいふ色は濃厚で、夏向きなどは暑苦しいものである。井上博士が色に其れ〳〵特有の感じがあるとを述べられたとがあつた、それに黑は陰鬱を意味するとあつたが、暑いといふとは陰鬱に調和する、洋畫家がよくこの繪は溫かいとか寒いとかいふが、これも色合の感じをいふのである。

石も木も眼に光る暑かな　去來

石や木が爛らす如き日光を反射して、見る目も暈く計りの樣を描いて炎暑の感を顯はしたのである、流輝赫々永晝炎々といふ趣である。

夏の句

母も子も蠅打つ兒も寢入りけり　琴風

夏の午過である、母が子に晝寢をさせようとして添乳をして子守唄でも歌つて居る、傍にその子の兄さんでもあらう、大きい子が蠅を打つて居る、頓て乳を吸つて居た子はす

俳句評釋

やゝと寢た、そのうちに阿母樣もついぐつすりと寢込んで仕舞ふ、蠅を打つて居た子も横に成て寢てしまふ。部屋が靜になつて三人の快い氣息の音、軒端に風鈴の音、庭樹に蟬の聲といふ時を寫したのである、この句は「瓜作」といふ書の中の「心よげなるもの」といふ題のところに入れてある、いかにも心よげな有樣だ。

蟬一つ三つ鳴て日は出でに鳧　祥禾

夏の明方の景である、夏の晝間は蟬の聲で喧しいが、夜は靜だ、黎明になつても靜だ、そのうち一つ二つ三つと早起の蟬がまだ涼しい聲で鳴き始める、その時旭日が出た、といふのである、

僕が或夏美濃の養老山に遊んで某樓に一泊したことがあつた。朝早く目が覺めた、秋の如き山氣が蚊帳に迫る、腹這ひになつて日記を書いて居る、すると忽ち後の山で蟬が一聲チーと鳴いた、すると此樓に近い所で又蟬の聲が一聲、もう夜が明たかと思つて起き上つて戸を押明けて見ると、山は小雨が降つて濛々として居るが、遙に見渡さるゝ尾濃の平野の果に旭日が出て、水ある處は悉く輝いて居る、山の蟬聲は追々と數を增して來た。僕はこの句を誦するといつもこの養老の朝を思出す。

夏の句

俳句評釋

雨蛙芭蕉に乘りてそよぎけり　其角

雨中の景であらう、小さな雨蛙が一疋、幅の廣い芭蕉の葉の上に乘つて居る、風が吹くので、芭蕉の葉は雨蛙を乘せたまそよいで居る、それを雨蛙を主にして、「芭蕉に乘りてそよぎけり」と云つたのである、庭前の實景で、青々として清涼な趣である、

罷り出でたるは此藪の墓にて候　一茶

「罷り出でたるは此あたりに住居致す……でござる」などゝいふのは狂言の名乘である、墓が落着き澄まして足を踏ん張つてる樣は、いかにも能役者か狂言師のやうで、「罷り出

でたるは」などゝやりさうである、この空想の名乘で墓そのものゝ態度を遺憾なく顯はして居る。「罷り出でたる」といふのが、彼が重々しい體を運搬して來たところを能く寫して居る。この句を誦して墓を見、墓を見てこの句を誦すると實に可笑しくて耐らなくなつて來る。

丘の家や蓮に吹かれて夕茶漬　一茶

蓮池の傍に一寸小高い丘がある、その上に百姓家かなんか粗末な家がある、涼しい夕風は池の方から蓮の香を含んで吹き渡つて、風樓に滿つ、ともいふべき有樣である、そこで晩飯の茶漬を食つて居る景を詠んだのである、「丘の家」とい

俳句評釋

ふこの家が大厦高樓で無いのは、下の五文字の「夕茶漬」といふので顯されて居る。いづれ漬物位で淋しい膳に對して居るのであらうが、この時の味は大牢を凌ぐのであらう。「遥に吹かれて」といふ語が面白い。

屋根ふきは屋根で涼の噂かな　太祇

夕方になつたが屋根ふきはまだ仕事が片付かぬと見えて屋根で働いて居る。町には湯上りの浴衣姿で涼みに出てる人があちこちに見える。屋根から瞰下せば通りも横町も一目だ。「オイ源公俵屋の丙儀が出てるせ、お里は爭はれねえ、三十面下げてあの口紅はどうだい、馬鹿にしてやがら

あ」などゝ遣つてるところである。一體涼といふものは人の噂で持切りのものである、それを屋根の上から、その涼の噂をして居るといふ着眼が斬新だ。

第三章　秋の句

今朝秋と知らで門掃く男哉　存義

今日はもう立秋ぢや、さう思へばこの朝景色、何とやら哀が深う覺える、風の音、雲の色、思ひなしかは知らぬが昨日の如で無い、門口を掃いて居るのは茂平ぢやな、彼などは今朝が秋とはよも知るまい、たゞ、無心に塵を取り居る。あの、無心な朴訥な樣子が、いかにも立秋に相應しいわい。

秋の句

俳句評釋

秋來ぬと目にさや豆の太り哉　大江丸

さや豆の太るのを見ると、秋が來たといふことが著しいといふだけの意である。古今集秋の部の第一に出て居て人口に膾炙して居る「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」といふ敏行の歌を使つて「さやか」の「さや」といふのを、さや豆に言ひ懸けたのである。この細工が細工めかずして句の趣が面白く出來てるのは妙手である。

初秋になり濟したりちぎれ雲　成美

夏のうちは雲の姿が怖しい。所謂雲の峰、暑い重さうな雲が塊まつて、浮んで居るといふよりは寧ろ聳えて居る。

そんなのが見えなくなつて小さいちぎれ〳〵の雲が輕さうに浮んで居る空を仰ぐと、あゝこの空工合いかにも、秋になつて仕舞つたわいと感ぜられる。夏と秋との雲の變化は著しいものである。暑い日に雲の峰を見た目で、涼しい夕方などに優しい秋の雲を見ると、實に嬉しく思はれるのである。

七夕や加茂川わたる牛車　嵐雪

これは單に叙景である。七夕を祭るといふことは古い風習であり、御所でも盛に催されたものであるから、七夕の夜に加茂川を牛車が渡つて行くといふ景色が、一つの纏つた

俳句評釋

趣をなして居る。平安朝式の趣がある。源氏の繪卷物でも見るやうな趣がある。

朝顔や盥の前に新なり　召波

盥の前に朝顔が新しく咲いて居る。といふ寫生である。「盥の前に咲きにけり」とか「盥の前に咲き並ぶ」とかいはずして「新なり」と言つたのが小氣味よい。又盥と朝顔の取合せもよい。

四五人に月落ちかゝる踊かな　蕪村

踊は盆踊、盆踊には今も夜を徹するが常である、踊り踊つて果てしも無いうちに、流石に追々と人が減つて行つても う明方近くになつた。まだ熱心に踊つて居るのは僅に四五人、その時月落ち烏啼かむとする景である。賑やかな踊そのものゝ、淋しい終りの景を見付けたのが面白い。醒雪子は、人事を句にするには、人事のみでは下品になつていけない、自然を加味すると佳い句になる、この句も月がある爲に美しくなつてるといはれた。

秋の句

魂祭母屋の妻戸の音は何　嵐雪

盆の魂祭の夜、母屋の妻戸がゴトリと音がした。はて、何の音だらうと言つたので、風の音か、猫でも這入つた音だら

俳句評釋

うか、或は聖靈樣がお出でになつたのではあるまいか、といふゾッとする疑ひが餘情に含めてある、物凄い句である。

稲妻にけしからぬ巫女が目ざしやな　嵐雪

稲妻が光つた。それを仰いだ巫女の目つきの凄さが普通で無い。と言つて、この巫女に神がゝり(神樣が乘移られると)した樣を言外に示して居る。前の句と同じ言ひ振でこれも神がゝりといふ事をいはずして「けしからぬ」といひ「やな」といつて「目ざし」の如何に凄いかを思はせたので、神氣人を襲ふ趣を成して居る。

裸身に麻の匂ひや相撲取　許六

かういふ句は説明が爲難くて困る。着物の麻の香が身に付いて、裸になつて居ても麻の匂ひがする、といふと。これは相撲取で無くてもあるとではあるが、斯ういふ事がいかにも相撲取くさい、裸の相撲取の傍へ行つたら、麻の匂ひがしたといふとは、相撲取そのものを深く印象させるではないか。

木曾山へ流れ込みけり天の川　一茶

秋の句

物淋しい秋の夜半、一天晴れ渡つて天の川の影が鮮かであつたのが、夜の更けるに從つて次第々々に傾いて木曾の

俳句評釋

山の方へ消えてしまつて、あとはたゞ山の黒い影が蕭瑟たる秋風に動くやうに見える景である。「流れ込みけり」に十分の勢がある。木曾の山といへば、木深い山の様が思はれる。雄渾な句である。

牛部屋に蚊の聲暗き殘暑かな　芭蕉

殘暑といふ者は、いつまで此様に暑いのだらうとうるさく、ぢれッたく思はせる者である。淡暗い牛部屋に蚊の聲が聞えるといふのは、うるさく蒸暑い様な心持のする様であるが、又牛部屋であるだけに秋の陰氣な心持も見えて居る。殘暑の景として動かぬ所であらう。「蚊の聲暗き」といふのは、暗い所で蚊の聲の聞えるのを文なした言振である。

秋の句

城内に蹈まぬ庭ありの轡蟲　太祇

怪しい趣のある句である。城内に蹈まぬ庭があるといへば、何か緣由があるに違ない。嘗てこの城が大軍に攻められた時に、何某といふ武士が恨を呑んで立ち腹を切つたなどゝいふ怖しい遺跡で、それに付いて種々な怪談が傳へられて居るので、人が憚つて蹈み入らぬやうになり、草深く露滋く荒れ果てゝ居る。そこで轡蟲が鳴いてるといふのである。この轡蟲が斯る所によく調和して居る。かういふ句は時代物的の句とでもいはうか。時代物的や小說的

俳句評釋

の句も面白いものである。

草の葉を遊びありけよ露の玉　嵐雪

草葉の露は果敢ない譬にいふが、かう見て居ると、美しうて愛らしいものぢや、あれ〳〵露が葉を辷るわい、根附の玉の樣に大きくなつた。そら落ちた、と思へば下の草に留まつた。向うの方のは横に飛んだわ、さて〳〵面白いとぢや、もつと〳〵勢よく右へ左へ上へ下へ自由自在に遊んで歩かつしやい。これ、露殿々々ハ、、、、、。

白露や茨の刺に一つづゝ　蕪村

細かい茨の刺毎に、奇麗に白露が一つづゝ置いて光つてる。刺に露、この見付け所が既に凡でないのに「一つづゝ」で置き渡したる樣が遺憾なく現はれて居る。

今貸した提灯の火や草の露　凡董

面白いとを云つた者である。客が歸るといはれるので此邊は田舍道で危いからと言つて、提灯を貸して上げた。客は禮を云つて去られた。草に一面の露の置いて居る晩である。枝折戸に立つて見送つて居ると今貸した提灯が草葉の露を照らし〳〵、だん〳〵小さくなつて行く、哀な風情に思はず見惚れて居るとハクション、寒くなつた。どりや

俳句評釋

内へ這入りましよ。

鐘の聲〳〵桐の一葉落つ　白雄

鐘の聲がボーンと響いた。秋めいた鐘の音だと思つて居ると、またボーンと鳴る。その途端にバサリと大きな桐の一葉が目の前へ落ちた。といふ淋しさである。「鐘の聲鐘の聲」といふのに、一聲毎に身にしみ〴〵と感ずる樣が見えて居る。

耳に珠數かけて折るなり草の花　一茶

よい花ぢや。どりや此れを折つて佛樣に上げませうオッド、危い〳〵尻餅をつかずに濟んだのも佛樣のお蔭ぢや南無阿彌陀佛〳〵。

去年賣りし牛に逢ひけり秋の風　大江丸

去年金に困つてあの牛を賣つた。あの斑の工合、たしかに其れに違ひない。乃公が飼つてた時よりは大分痩せたやうな、あの男の面がまち、嘸無慈悲に使ひこくることであらう、あ、立ち留まつた、乃公を見て居るやうだ。はれやれ可哀さうに叱られた。鞭の音ピシリ牛の聲モーー、秋風サーッ、落葉カサ〳〵。

俳句評釋

秋の雨草の底なる螢かな　一笑

秋の螢といふのが句の題になつて居る。秋に殘つて居る螢で、淋しい趣のものである。秋の雨がしと〳〵と草に降つてゐる、その草の茂つた底の方に、螢が一疋潜んで弱い光を放つて居る、といふ憐れな景趣である。

寒いぞよ軒の蜩唐辛子　一茶

夕方である。軒に近く蜩が悲しく叫んだ。見れば唐辛子が色づいて居る。單衣では寒くなつて來たといふ極めて細々とした、秋を穿つた句である。丁度秋の初風がちと身にしみるといふ頃に風葉子が訪れて來て、話をして居ると、忽ち蜩の聲が聞えた、子が「寒いぞよ軒の蜩唐辛子」といふ句は佳い句だねえ、僕は一茶の句で一等これが好きだ」と言はれた。僕はこの句を知らなかつたので「寒いぞよ軒の蜩唐辛子」と口吟んで見て「なる程、佳い句だねえ」といつた。それから秋風身に入みる毎に口癖のやうにこの句を吟ずるので、今では家の者が皆記憶してしまつた。

秋の句

名月に露の流るゝ瓦かな　士朗

名月とは陰暦八月十五夜の月、見る人の胸も澄み渡る斗天地只月の光である、斯くて靜に夜の更け行くに從つて、夜氣が瓦に凝つて露となつて細く流れる、それも月の光で鮮

俳句評釋

に見えるのである。士朗は尾張の醫者で町住居をして居た人であるから、この句も名古屋の市中の月夜を詠じたのであらう。いくら月夜でも瓦屋根の續いてる市街の樣は哀の深からぬものであるが、瓦に露が流れるといふ所に目をつけて見れば、俗中雅味あり、寂も十分あり、物音靜まつた深更の町を物干臺から見渡した趣が淋しく現はれて居る。

名月や家に戻れば親一人　平角

月に浮かれて漫歩に時を移して、さて家に戻つて來ると、老父母がこれも緣端へ出て月下に淋しく物語つて居られる。この淋しい樣が名月によく調和して居る、親二人と言つたので、たゞ其丈の家族で妻も子も無い、暖かみの少い、寂寥な家である事が明に想像される。

名月や煙這ひ行く水の上　嵐雪

この水は池かなんかで、まづは動かぬ水と想はれる、其水面を月が清く〳〵照らして居る、そこへ其邊の家から出る煙が高く昇らずして、低く徐ろに水の上を行く樣である。這ひ行くといふので煙の動き方の徐ろなことが顯はれて、靜かな月夜の趣が顯はれて居る。自分は、この「這ひ行く」を「這うて行く」としたら、更に煙の動き方を徐ろに想はせることが出來るだらうと思ふ、併し古俳家の名吟、自分如きが朱を加

秋の句

へようとするは以ての外である。

名月や長家の陰を人の行く　闇指

これも市中の月である。汚ない長屋が續いて居る陋巷、月を背にして長家の表は黑く見えて、其影が町の半程まであつて、向う側は極めて明かに見える。その明るい方を行かで、長家の陰の所を何者か行くといふ風情である。單に目前の景であるが、なか〳〵趣のある句である。

名月や夜は人住まぬ峰の茶屋　蕪村

日光なぞでもさうであるが、山路の休息所には、晝こそ婆

さんかなんか〻茶でも煮て居るが日の暮れかゝる頃には人里へ行つてしまふ。今夜名月を賞せむと或山の峰へ登つて見ると、そこに茶屋がある、誰も居ないので、淋しげに見える。荒れ果てた不破の關屋を見たやうな感じがする。煙草の吸殼、團子の串などがそこに落ちてるのも、月下に見れば物哀に思はれる。

名月や人靜まりて樹の雫　若翁

森のあたりで名月を賞して居る。世間話なぞが出てなか〳〵賑やかであつたが、次第に秋氣月光身にしみて誰も彼も襟を正して默々としてしまつた(或は家々に歸つて寢

俳句評釋

靜まつたと見てもよい)。時この時幽かに寂寥を破る者は何ぞ、木の葉より點々としたゝる雫の音である。見るは月のみ、聞ゆるは樹の雫、幽寂の極閑寂の極である。

鯛は花は江戸に生れて今日の月　　其角

西鶴は「鯛は花は見ぬ里もあり今日の月」といふ句を吐いた。即ち鯛は見たともない里もある、花は見たとも無い里もある、併し其の樣な憐れな僻遠な地方の者も、今日の月即ち仲秋十五夜の月の清光には浴して居るのである、といふ句である。それを採つて其角は我輩は江戸ッ兒だ、鯛はといはゞ飽くまで食つて居る、花はといはゞ花のお江戸見盡せぬ程花を控へて居る、かゝる自由な結構な江戸で、なほこの月に對するとは幸極まれりと謂つべしだと、大に得意がつた句である。其角の句には屈托が無い。積極的である。

月天心貧しき町を通りけり　　蕪村

月が既に中空高く昇つて居るといふからには深更である、其靜寂な深更に、貧民窟を通つたといふのである。茅屋ばかり並んで居るが、月夜であり、戸が閉めてあるから汚穢な所は見えぬ。却て茅屋のみの樣が雅に見えて、高樓の櫛比してる市街よりも月に調和して居る。淋しい趣を面白く詠じたのである。

秋の句

俳句評釋

木犀の香に追はれてや雲ちぎれ　荆玉

無論晝間であらう、木犀の芳香は高く〳〵騰つて其爲にか空の雲はちぎれ〳〵になつて來たといふ樣である。空の雲が段々ちぎれて來た、木犀が頻りに香つて居る、といふのを主觀的に結び付けたので、木犀の香の強さが極端に寫されて居る。

鐘遠し芒の風の我を吹く　半古

悄然として芒原に立つて居る。折しも入相の鐘が遠く響いた、一陣の風は四邊の芒に起つて、それが我身を吹くといふので、氣の滅入るやうな心細い趣を捕へたのである、芒から風が吹き起ると見て芒の風と言つたのが巧である。我を吹くといふので、いかにも我一身に凄凉な氣が迫るやうな所を遺憾なく示して居る。

花薄こゝに惟然が行燈かな　樗良

彼の蕉門の奇人惟然坊が嘗て提灯の代りに行燈をぶらさげて闇峠を越えたといふ話がある。この話に花芒を配したのである、花芒とは穂芒といふに同じ意で、穂の白く出た芒を言ふのである。闇峠の山路の景、花芒が白く風に靡いて居るなかに惟然の行燈が打棄てゝある、といふのである。

俳句評釋

山犬のがばと起き行く芒かな　召波

芒の中に寢て居た山犬が何を思つたか、突然起き上つて行つた、あとに芒が風に靡いて居る。山犬といへば凄い、それががばと起きて行つたのは多分餓ゑて獲物でも探しに往つたのであらう、いよ〳〵凄い、これに加ふるに四邊は芒である。荒涼な景趣である。

月の出る山をうしろに案山子かな　石睡

今向うの山から月が出かゝつて居る、それを背にして山田の案山子が立つて居るが、月の出て來るに從つて案山子の姿が朧氣に見えて來る。あたりに人の影も無い。これ

に對した人の感情はいかに寂しいであらう。秋の山家の樣が盡きて居るではないか。

姨捨はあれに候と案山子かな　一茶

姨捨山の邊の田に立つてる案山子の樣子が、姨捨を案内しさうな風だと見て、案山子に物を言はせた俳才を見給へ。どんな山でもよさゝうであるが、どうも姨捨といふのがこゝでは動かぬやうである。雷電といふ謠に、菅丞相の亡靈が法性坊の許へ來て、祈禱をせよとの勅命は拒んで呉れと賴む、坊は勅使三度に及ばゞ我も王臣なれば勅に隨ふといふ、菅公赫怒して本尊の前に供へてあつた柘榴を嚙碎いて

俳句評釋

くわつと壁に吐いたれば火炎となつて燃え上つた、とある。この柘榴は實に不動の好例で、柘榴の外のものでは到底無益だ、饅頭や羊羹であつたらとても火炎にはならない、といふことを嵐雪が説いて居るが、これは動不動といふことを明に示したので解り易い。この句の痰捨も雷電の柘榴同樣どうしても動かぬ、痰捨であるから面白いのである。

あぢきなき墨の砂哉夜寒かな　五明

夜寒は秋やゝ深うなつて夜になると寒さを覺える、それを夜寒といふ。その夜寒の時に貧士古机に倚つて墨を磨つてるとがり〳〵と砂の音がする、あの砂入りの墨を磨つてあの音を聞くのは情無いものである。そんな安墨を使つてるのだから貧しい人には違ない、故に夜寒は殊に身に入みることが想像される。

一人と帳面につく夜寒かな　一茶

これは獨旅を詠じたもので、宿帳に一人とつけられて、煤け行燈の下に悄然と膝を抱いて居る夜寒の有樣堪へ難い程物の哀を感ずるのである。

秋の句

明星や尾上に消ゆる鹿の聲　曲翠

明方になつて鹿は次第に山に入つて頓て尾上の方に消

えてしまつた、星影もだん〳〵に消えて明の明星が山の一角に懸つてる、といふ秋の曉の有様である。

或僧の細き迷や鹿の聲　牧童

この僧は出家して間もない若僧であらう。妻呼ぶ鹿の鳴く聲を聽いて、一寸煩惱が起つた、といふ心裏の微細な働きを寫したのである。「細き迷」といふ語が實に金玉のひゞきである。或僧、或人、などゝ或といふ字を使ふことは元祿の俳壇には一寸流行したらしい。

霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き　芭蕉

これは野晒紀行にある句で、箱根を越える時の吟である。霧は時雨と注いて衣袂悉く濡れたるを、絞りもあへず山路をたどる、富士は何處にあるか更に見えずたゞ山の木立が濛々として居る計り、この趣を面白いと感じたのが實に芭蕉の芭蕉たる所である。

有明や淺間の霧が膳を這ふ　一茶

淺間山近くの山家の朝飯の體である、淺間近くのことであるから木立も稀で磊々たる石が處々に見えるのであらう。斯る處の曉天の霧が濃く渡つて、朝飯の膳に吹き込む、詫しい樣を言つたものである。

俳句評釋

夜もすがら秋風聞くや裏の山　曾良

曾良が加賀の大聖寺の城外全昌寺といふ寺に泊して吟じた句である。寺が靜で旅愁人をして眠らしめず終宵夢を結ばずして裏の山の木立の秋風に鳴るのを聞き明して居るといふ意である。

焚きたての食の匂や秋の風　李由

古い句集には食といふ字を飯と訓ませてある。秋風吹く頃、焚きたての飯のにほひがする、といふまでのことである。かゝる句は夏は疎ましいが、秋風の頃になると懷しくなつて食慾も增して來るのである。

秋風の下に寢て居る漁村かな　樗堂

漁村夜更けて人悉く靜まり、たゞ秋風の吹き渡る音と波浪の岸を嚙む響のみである。秋風の下と言つたので、漁村の家々の低い所も顯はれて居る。又寢て居る漁村といつたので寂寞たることがよく見え、從つて風の音の明に高く聞えるとも想像が出來る。

手を組みて梢の猿や秋の暮　其角

梢の猿が手を組んでいかにも、人間の思案顏といふ身で居るのを秋の暮即ち秋の夕暮の景として用ひたのである。これはもとより事實では無くて想像して、猿の手を組ませ

たのである。「鶯の身を逆に初音かな」でも同樣想像で作つた句と思ふ。併しこの兩句ともに不自然には感ぜられない。

馬下りて馬士が別れも秋の暮　　儿　菫

秋の夕暮、旅中で馬を雇つて或驛まで來て馬を下りて賃を拂つた、馬士は禮を述べて去つた。人戀しとはこの頃の常、心無き馬士の後姿もどういふものか見送られて名殘の惜まれる心地がする。

秋の蚊や香の烟の前を行く　　曉　臺

この句の香を焚いて居るところは茶室に茶人が坐して居る前に香の烟が立つてるのであるか、或は佛前に老僧が焚いた香であるか、兎に角香の焚いてある所といへば閑寂な場所に違ない。その香の煙の前を弱々しい蚊が影の如く飛んで行く、聲も立てずして飛んで行く樣である。此處に坐せる人はこれを追はうともせず打たうともせず寂然と蚊の行方を仰いで居る景趣が想像される。

行水の捨所なし虫の聲　　鬼　貫

夜に入つて行水を使つた。使ひ終つてさて湯を捨てようとしたが、四邊唧々たる虫聲でどちらの方へも此をなが

して彼等を驚かすに忍びず途方に暮れて居る樣である。千代の「朝顏に釣瓶とられて貰ひ水」は植物に對しての愛情これは動物に對しての愛情である。この二句とも昔から人口に膾炙して居るのは、我國人が動植物に對して深厚なる愛情を注ぐ國民であることを證明して居る。

この句に就て面白い話がある。或中學校の讀本にこの句が載せてあるが、其本を出した本屋が、それを敎へる先生の參考の爲にと、註釋の書物を發刊した。その書物を見ると、この「行水」といふのを「ゆく水」と書いて、珍妙な講釋をそれに當てはまるやうに附けてあつた。これを「行く水」と訓んで意味の取れる筈が無い。こんなものを參考にして先生

が生徒に敎へたら隨分變挺なものであらう。御用心々々。

松の木に吹當てられな秋の蝶　舟泉

蚊の如きでも秋の姿は憐れであるのに、蝶の如き元來優美なものが秋になつて弱々しくなつてる樣は眞に可憐である。彼は最早風に抵抗する力も無くなつてるのに、秋になつては、時々强い風が吹くので、思ふ草花にも止ることが出來ない。見て居て冷々する。あの松の木へ吹き當てられはしまいか、あのゴッ〳〵した幹へ吹きつけられたら微塵に碎けるであらう、と心痛して居る詩人の同情である。

俳句評釋

御祭に赤き出立の蜻蛉かな　一茶

秋の實りのよいので、村では豐年祭が始まつた。子供や若い衆は華美な打扮で寄り集る。丁度この頃は赤蜻蛉の飛ぶ頃である。子供風の觀察をする一茶はこれを見附けて、蜻蛉も赤く粧つて御祭に出て來た哩、と興じたのである。

寢返りをするぞわきよれ蚤　一茶

一茶の寢て居るつい傍で蚤が鳴いて居る。一茶が寢返りをしようとしたが蚤が餘り近いので肱で潰す恐れがあるから、聲をかけて「オイ蚤乃公は今寢返りをするぞ、危いから脇へ寄れ」と言つたのである。物にもあらぬ蚤をも大切

にする彼の心も現れ、又彼の住所の佗しい樣もよく現れて居る。よい句である。

夕月に誰やら戀し萩の原　美角

見渡せば一面の萩の原、夕月が弱い光を放つてる。身に入む風に吹かれてこの景に對して居ると、人を戀ふ心が自ら起つて來る、誰を戀ふといふ目的は無いが、この胸に起つて來た深い〳〵情を注ぎたい、誰に對つて注ぎたいのか我にも解らぬ、といふ幽な秋の感じを歌つたのである。

僕は情慾と肉慾といふ語は使ひ分けたいと思ふ。情慾はおのが情を注ぎ感を注ぐ目的物を探す慾である。肉慾

俳句評釋

は全然生理的の慾望である。と斯ういふやうに區別したい。この區別に從へばこの句は情慾を歌つたものと言つてよい。

わたましや先へ來て居る蛬（きりぐす）　露川

わたましは移轉である。家移りをして、新居に來て見ると、自分よりもう先へ蛬殿は御移りになつてるといつたのである。新しい此處に居る蛬を舊居に居た蛬が移つて來たのと感じたのである。理窟にはあはない感じ、稚い感じであるが、文藝には怜悧は禁物、稚氣結構である。美しい稚氣最結構である。

秋の句

花越ゆる水匂ひけり岩の菊　閑更

岩間に菊が咲いて居る。その岩は激流の岸にあるので水が時に菊の花を越す、するとその水は悉く芳氣を溶かして流れ去る。といふ景色。強い筆を揮つた米僊の畫のやうである。

丸盆に白菊を解く匂ひかな　几董

一束貫つた白菊を、いよ〳〵瓶に活けようとして、丸盆の上で束を解いた、するとパッと香氣人を襲つた樣である。白菊とあるので、趣が一層上品である。

俳句評釋

霜旭一輪の菊の上にあり　大江丸

霜を透して昇つた旭が、咲き殘つた一輪の菊を照して居る。外に花が無い。たゞこの一輪の菊に日光を集めて居るやうな有樣である。霜旭といふ造語も面白い。

黃菊白菊その外の名はなくもがな　嵐雪

菊とか朝顏とかいふ種類の多いものは、やれ靑海波ぢやの日出鶴ぢやのと矢釜しい名が澤山あるが、我は其樣な多くの名は好まぬ、たゞ黃菊と白菊この二つで澤山であるといつたのである。句の表には名のみのことを言つたのであるが、むづかしい名も嫌へば、そんなむづかしい名の附いて

る變種の菊も嫌ふ意味が籠つてる。

其角は人に菊の句を乞はれると、おのが句を書かずして必ず嵐雪のこの句を書いたといふことである。

畔柳文學士が、嘗てこの句に就て二時間に涉る長演說をなさつたさうだ。どういふことをいはれたか聞きたいものであつた。

この句は繁より簡を愛する、濃より淡を愛する、日本人の趣味の一端を示して居る句である。

秋の句

松明（たいまつ）にふり向く方や裏紅葉　曉臺

夜の山路である。松明の光で振り向いて見ると、紅葉の

俳句評釋

裏が一面に見えた、といふ景である。この同じ作者が、梅の句で「灯ともせば裏梅がちに見ゆるなり」といふのを吐いてるが、丁度この句と同趣向である。裏の好きな人と見える。

紅葉靜に川浪霧の起る哉　畝波

岸の紅葉は靜寂であるに反して、溪流は音を立てゝ居る、その浪頭から薄衣のやうな霧が騰る、といふ山間の景らしい。關西鐵道で笠置邊を通ると、丁度こんな景色が車窓に迫つて展ぜられて居る。

大原女の足の早さよ夕紅葉　蕪村

秋の句

夕日に紅葉が映えて居る、山城の秋。そこを大原女が通つて行く景である。その大原女がズン〳〵早足に紅葉を縫つて紅葉の中へ隱れてしまふところである。「足の早さ」といふ所を捕捉したのがいかにも面白い。

銀杏ふんで靜に兒(ちご)の下山かな　蕪村

叡山かなんかの兒、兒といへば女を欺く美男、濃紫の振袖などで、山を下りて來る樣である。山路は今銀杏の葉が黃金を敷き詰めて居る、そこをサク〳〵と踏んで靜に下りて來る樣である。目の覺めるやうな美しい句である。

俳句評釋

澁柿や鐘も凹めと打つける　　巣兆

まづ今ならば生徒の遠足といふところである。とある寺で休憩してをると、藪の蔭にうまさうな柿が取れよといはぬばかりに、晴れ切つた秋の日に美しう輝いてる。こんなとにはいつも皮切りをやる何某といふ小冠者が早速一つ取つて來て、衆目環視の中で、渋めとばかりガブリと、一口やると、澁きこと舌の椀げる計り「畜生」といひ樣、鐘樓堂目がけてベースボールの手並を見せると、鐘の凹まむばかり强くあたつた。といふところである。殘念がつた樣が「鐘も凹め」といふのに十分現れて居る。

秋の句

夕風やしぶ〳〵動く長ふくべ　　几董

瓢既に奇なものである、長ふくべに至つては愈奇で怨なものである。長瓢元來大の物臭で、なか〳〵動かないが夕風に頻りに吹かれて厭々ながらフラリフラリと動いた樣である。この「しぶ〳〵」が實によく利いて居る。

行秋をふらりと蚊帳の釣手かな　　史邦

たゞ何處にもある、室内の樣であるが、取り忘れた蚊帳の釣手がふらりと垂れて居るとこに目を付けたのは手柄である。秋の行く寂しさを室内に求めたのがこの句のよいところである。

第四章　冬の句

あら樂し冬立つ窓の釜の音　　鬼貫

張更へたばかりの障子に、落葉がガサ〳〵と音して通り雲に暫く日の陰つた寒さ。あゝ今日から冬である、この時窓の下の釜は恰度松風の音を立てゝ居る。この趣に對して雀躍して實に愉快だと叫んだのである。寂しい底に小さき活動のあるのを鬼貫が歎賞したのである。あゝ冬！冬が來たといふことは、多くの俳人をして雀躍せしめるのである。芭蕉其人を季候に比すれば春でも夏でも無い。秋のやうであつて矢張り秋でも無い。確に冬である。蕉

風の俳趣は總て冬である。春の花も秋の紅葉も總て冬化して歌ふのである。鬼貫はもとより芭蕉の門人では無いが、彼の俳論を見ると言々句々全く芭蕉のと相一致して居る。

百姓の物のやうなる小春哉　　寥松

今の十一月頃天氣のよい日は實に長閑で、宛然春の如くである。故に小春といふ。併し小春は小春である春では無い。判然區別がある、春は賑やかである、浮いてゐる、貴族的である。小春は寂しい、眞面目である、平民的である。であるから春は都市に調和する、小春は田舍に調和するの

俳句評釋

で、ある。この句はこの點を言つたので、小春といふ氣候は百姓の專有物であるやうな氣がするといつたのである。小春日和の日曜に諸君が田甫路を歩きながらこの句を味はれたら直にその意を知り得られるであらう。

よく見れば蓑虫動く小春哉　魯隱

小春日和に緣先へ出て庭面を見てゐると、木の枝に垂下つて居る蓑虫のチョイ〳〵と動くのを發見したといふのである、斯る細い所に氣が附くのが小春である。春の景色は見渡す景色である、小春の景色は見詰める景色である。一

芝原や小春仕事に塗る鳥居　一茶

一茶の句がよく出るやうだが、集から句を選み出してるとどうも面白いといふのは、實に一茶の句に多い。自分に面白いと思ふ句で無くては評釋する氣になれぬ、敢て人を多く列べる必要は無い、唯自分が面白いと感じた句を諸君に紹介すれば可いのである。この句なども實に一茶で無くては捕へ得られない景趣である。必ず年寄つた職人であらう、村の稻荷樣の鳥居を塗ることを頼まれてゐたが丁度暇になつたので、小春の長閑に晴れ渡つた日、芝原へ出て、悠々と塗つてゐるところである。極めて呑氣な勞働、これが小春と調和してゐる。以て繪とするに足る。

俳句評釋

春の夜の夢見て咲くや歸花　千代

小春の頃、暖かな日影に欺されて、梅櫻などが咲くことがある、これを歸花、歸咲といふ。これを、春の夜の夢でも見て思はず咲いたのであらうか、といつたのだ。この「や」は疑のやである。この句は或は理窟らしくも聞えるけれども、面白い想像である。女らしい想像である。僕が歸花の面白さに感じたのは數年前鎌倉へ行つて賴朝の墓邊を歩いた時だ、こゝは風が當らず、日は暖で、梅が所々歸咲きをして居る。賴朝の墓は前に高い。果敢ないやうな而して悠然としたやうな心持が今でも忘れられない。場所も場所であつたが、彼時程盛に歸咲した景色を見たことは無い。

蒼みしは知らで居にけり歸花　太祇

歸花は思ひも寄らぬのに、もう咲いて居るのである、何時の間に蒼を持たのか、蒼んで居る時は知らなかつたといふのである。意外に驚いた樣で、又歸花其者を能顯して居る。

冬の句

芭蕉忌や時雨るゝ空を米買ひに　樗良

芭蕉は元祿七年十月十二日に歿したのである。故に毎年この日を芭蕉忌と稱へて、俳人は翁の靈を吊ふ例である。深川の芭蕉庵の臺所の柱には瓢が懸けてあつた、これは米入である。これへ弟子が米を持つて來ては入れて置くのであるが、何うかいふ間違で米の切れた時には、芭蕉自ら米